

船沖遺跡発掘調査報告書

県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯
総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

 鳥取大学附属図書館



0050294636

平成12年度

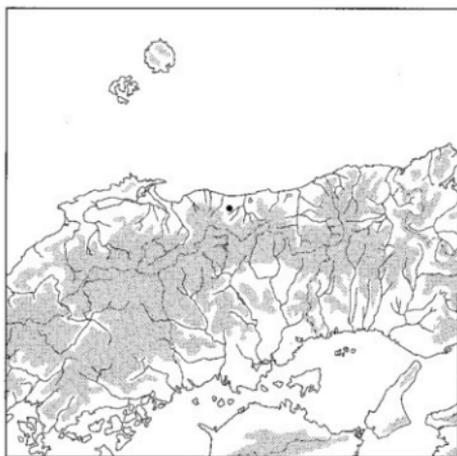
倉吉市教育委員会





ふなき
船沖遺跡発掘調査報告書

県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯
総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



遺跡略号 40SF

平成12年度

倉吉市教育委員会

倉吉市教育委員会
蔵

序

この報告書は、鳥取県倉吉地方農林振興局が実施する県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯総合整備事業に伴い、平成12年度に鳥取県倉吉市下米積字船沖・上乳母ヶ谷、上米積字船沖において行った発掘調査の記録です。

発掘調査の結果、古墳時代の竪穴式住居や掘立柱建物、縄文時代の落とし穴などをはじめとする多くの遺構を確認し、この地域に暮らしていた人々の生活の一端が明らかとなりました。

発掘調査の記録としてこの報告書が多くの皆さんに活用され、文化財に対する理解を深めていただく一助となることを願うものです。

最後になりましたが、発掘調査に際してご協力いただきました鳥取県倉吉地方農林振興局、鳥取県教育委員会をはじめ、関係各位に対し深く感謝の意を表すものです。

平成13年2月

倉吉市教育委員会
教育長 足 羽 一 昭

例 言

1 本報告書は、鳥取県が行う県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯総合整備事業に伴い、倉吉市上米横字船沖、下米横字船沖・下乳母ヶ谷で行った発掘調査の記録である。

2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

団 長 足羽 一昭 (倉吉市教育委員会教育長)

調 査 委 員 名越 勉 (倉吉市文化財保護審議会会長)

調 査 員 根鈴 輝雄 (倉吉博物館主任学芸員)

森下 哲哉 (文化財係主任)

根鈴智津子 (文化財係主任)

加藤 誠司 (文化財係主事)

岡本 智則 (文化財係主事)

岡平 拓也 (文化財係主事)

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子・金田朋子

事 務 局 波田野須二郎 (教育次長 12年9月まで)

景山 敏 (教育次長 12年10月から)

眞田 廣幸 (文化課課長)

中井 寿一 (文化課課長補佐 12年12月まで)

渡辺 峰寿 (文化課課長補佐 13年1月から)

藤井 晃 (文化財係係長)

藤井 敬子 (文化財係主任)

山崎 昌子 (文化財係主事)

内 務 整 理 泉 美智子・世浪由美子・松嶋あつ子・竹歳 暁子・山本 錦・米原 満

3 現場での調査は加藤が担当し、山根・金田が補佐した。内務整理は加藤が担当し、山根・金田・松嶋・山本・米原が補佐した。遺物写真撮影は森下が担当した。

4 本書の執筆は各調査員が検討し、加藤が行った。

5 遺構測量のための基準杭設置をアサヒコンサルタント株式会社に委託した。

6 第1図 (地形図) は、建設省国土地理院発行の1:25,000地形図「倉吉」「関金宿」「伯耆浦安」「泰久寺」の一部を複製・加筆したものである。

7 第2図 (地形図) は、1:2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。

8 挿図中の方位は、国土座標第V座標系の北を指す。

9 遺物に付した記号・番号は本文・挿図・図版で統一している。

10 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

本文目次

I 発掘調査に至る経過	1
II 位置と歴史的環境	1
III 調査の概要	2
1 遺構	2
2 遺物	24
IV まとめ	31
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図 船沖遺跡調査区位置図	4
第3図 船沖遺跡遺構全体図	5
第4図 1号住居遺構図	7
第5図 2号・3号住居遺構図	8
第6図 4号・5号・7号住居遺構図	9
第7図 6号住居遺構図	11
第8図 8号・9号住居遺構図	13
第9図 1号～3号掘立柱建物遺構図	14
第10図 4号～6号掘立柱建物遺構図	15
第11図 7号掘立柱建物遺構図	16
第12図 8号～11号掘立柱建物遺構図	17
第13図 1号段状遺構遺構図	18
第14図 1号～5号柵列遺構図	19
第15図 1号墳墓遺構図	20
第16図 1号・2号土城墓遺構図	21
第17図 1号・2号貯蔵穴遺構図	21
第18図 1号～6号落し穴遺構図	22
第19図 1号～5号土壇遺構図	23
第20図 1号・2号溝遺構図	24
第21図 3号・4号溝遺構図	25
第22図 1号～6号住居出土遺物	27
第23図 8号・9号住居、1号土城墓、遺構外出土遺物	28
第24図 石製品	29
第25図 船沖遺跡時期別遺構模式図	32

図 版 目 次

- 図版1 遺跡・遺構 調査区北側調査前全景 調査区北側調査後全景 1号墳墓 1号土墳墓 1号貯蔵穴
2号貯蔵穴
- 図版2 遺跡 調査区南側調査前全景 調査区南側調査後8号・9号住居付近 調査区南側調査後全景
- 図版3 遺構 1号住居 2号住居 3号住居 4号住居 5号住居 6号住居 7号住居 8号住居
- 図版4 遺構 9号住居 1号掘立柱建物 2号掘立柱建物 3号掘立柱建物 4号掘立柱建物
5号・10号掘立柱建物 6号掘立柱建物 7号掘立柱建物
- 図版5 遺構 8号掘立柱建物 9号掘立柱建物 1号段状遺構 1号柵列 2号柵列 2号土墳墓 1号落し穴
2号落し穴
- 図版6 遺構 3号落し穴 4号落し穴 5号落し穴 6号落し穴 1号土墳 2号土墳 3号土墳 4号土墳
5号土墳 1号・2号溝 3号溝
- 図版7 遺物 1号～6号・8号住居出土遺物
- 図版8 遺物 8号・9号住居、1号土墳墓、遺構外出土遺物
- 図版9 遺物 遺構外出土土器
- 図版10 遺物 凹石・敲石・磨製石斧・打製石斧・砥石
- 図版11 遺物 磨石・台石・砥石

I 発掘調査に至る経過

平成10年12月、鳥取県倉吉地方農林振興局（以下、農林振興局と言う）から、倉吉市下米積の主要地方道倉吉・赤碓・中山線（高城郵便局横）から下福田の市道国分寺・板線（JA鳥取中央すいか選果場前）に至る全長約0.7kmの農道新設及び拡幅の計画が提示され、埋蔵文化財有無についての踏査依頼があった。当該地は、11年度と同じく農林振興局から委託を受け県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯総合整備事業に伴い発掘調査を実施した、大沢遺跡群高峰・矢内谷峰遺跡（倉吉市国府）から約2km南に位置し、遺跡が密集する久米ヶ原丘陵を南北に貫くものであった。踏査を実施したところ、濃密な遺物散布が確認されたため試掘調査を平成11年12月に、国・県の補助を受けて実施した。^(註1) 試掘調査の結果、丘陵頂部で溝、丘陵頂部から南に広がる緩やかな斜面で土壌を確認し、遺跡の広がりが明らかとなった。

倉吉市教育委員会は農林振興局と協議を行い、開発範囲のうち畑地造成等の掘削を受けて遺構面が遺存しない部分を除いて発掘調査を実施した。発掘調査は倉吉市が鳥取県から委託を受け、倉吉市教育委員会文化課が主体となって実施した。発掘調査の場所は当初3箇所に分かれていた。1箇所目は、丘陵頂部から南斜面の標高約63～67mに位置する南北に長い道路拡張部分で、南北長さ約70m・最大東西幅約7m・面積400㎡である。2箇所目は、南北に延びる道路新設部分に直交して既存道路に接続する標高約55～57mの南斜面部分で、長さ約30m・最大幅約10m・面積200㎡である。3箇所目はごく緩やかな南斜面の標高約50～55mに位置する南北に長い道路新設部分で、長さ約80m・最大幅約10m・面積1,400㎡である。3箇所合わせた発掘調査面積は2,000㎡である。その後発掘の進捗に伴い、当初畑地造成等の掘削によって遺構が遺存していないと判断し調査範囲外とした部分、すなわち南北に延びる道路新設部分から既存道路に接続する標高約55～57mの南斜面にも遺構が遺存することが判明した。このため農林振興局と協議を行い、遺構が広がる500㎡を追加調査することになり、2つの箇所が重なって逆L字形の調査区となった。最終的な発掘調査は合計2,500㎡である。現地調査は平成12年6月1日から平成12年9月29日まで行った。

II 位置と歴史的環境

船沖遺跡は、倉吉市街地から西方へ約6kmの倉吉市下米積字船沖・下乳母ヶ谷、上米積字船沖に位置する。遺跡周辺は、中国地方の最高峰である大山（標高1,711m）の火山灰によって形成された、南西から北東方向になだらかな丘陵と浅い谷が交互に入り組む丘陵で、通称久米ヶ原と呼ばれる天神川支流の国府川流域左岸の河岸段丘上にあたり、丘陵南側縁辺部の尾根南斜面と南に広がるなだらかな地形となる。標高は約50～67m、水田面との比高差は約7～24mで平野部をすぐ見下ろす位置にある。以下、遺跡分布図（第1図）を中心に遺跡の概要を述べる。

縄文時代の主な遺跡は市内で20箇所余り確認されている。その多くが落し穴を確認したものであり、丘陵の調査でしばしば確認される。中尾遺跡（84基）・長谷遺跡（57基）・横谷遺跡群（47基）などをはじめとして、頭根後谷遺跡・大仙峯遺跡・大山遺跡・イキス遺跡等、市内で200基を越え、落し穴が密集する地区である。その築造時期は不明確なものが多いが、30基については出土遺物・炭の年代測定から早期から晩期と推定されており、前期から後期にピークがある。住居址は取木遺跡・津田峠遺跡で確認している。

弥生時代の遺跡は、久米ヶ原丘陵を中心に集落が多く存在する。前期の集落址は未確認であるが、船沖遺跡で

土器が確認されているため、平地、緩高地の調査が進捗することにより確認されると思われる。中期には、中峯遺跡(12)・遠藤谷峯遺跡(9)・後中尾遺跡(36)がある。後期になるとその数は増大する。主なものとして、中峯遺跡・遠藤谷峯遺跡・白市遺跡(11)・後中尾遺跡・服部遺跡・観音堂遺跡(25)・コザンコウ遺跡・夏谷遺跡・沢べり遺跡などがある。コザンコウ遺跡は竪穴式住居、掘立柱建物、貯蔵穴が1単位となり、3単位のまとまりが確認されている。弥生時代集落の多くは、古墳時代にも引き続き営まれる。墳墓は、前期の土壇墓であるイキス遺跡、後期の阿弥大寺四隅突出型墳丘墓(30)・大谷後口谷墳丘墓(13)・二タ子塚遺跡土壇墓群などがある。

倉古市西郊の古墳時代前期の首長墓は、壘風鏡、三角縁神獸鏡など豊富な遺物が出土した国分寺古墳(前方後方墳・全長60m)を初現とし、大谷大將塚古墳(前方後円墳・全長50m)、上神大將塚古墳(円墳・直径30m)がこれに続く。発掘された前期の古墳としては首長墓クラスではないが、二タ子塚遺跡の方墳群がある。古墳時代後期は服部古墳群・駄道東遺跡・頭根後谷遺跡・沢べり遺跡・イザ原古墳群などが調査されている。古墳時代終末期は、方墳、多角形墳のある両長谷遺跡、取木遺跡、一反半田遺跡がある。

奈良時代の官跡は、物資取納施設とみられる大型掘立柱建物群を確認した不入岡遺跡、伯耆国庁跡(16)がある。

寺院跡は、7世紀中頃に大御堂廃寺、7世紀後半に大原廃寺が建立される。8世紀前半は石塚廃寺、中頃には伯耆国分寺、法華寺畑遺跡(国分尼寺)が造られる。この頃、藤井谷廃寺も造られる。

奈良時代から平安時代の集落址は横田矢戸遺跡(23・24)・平ル林遺跡・西前遺跡・観音堂遺跡・大栄町向野遺跡などで、多くが7世紀後半から9世紀にかけての遺跡である。

III 調査の概要

発掘調査は、西から東に延びる丘陵を南北に貫く道路新設部分と道路拡張部分2,500㎡について実施した。基本層序は、上層から表土(黒褐色土)、黒褐色土、褐色土(ソフトローム土)、黄灰色砂質土(ホーキ火山砂)で、調査区北端と南端は表土が浅く、表土下約20cmから30cm下で褐色土と黄灰色砂質土の混じった遺構検出面となるが、調査区中央部は表土(黒褐色土)、黒褐色土の堆積が約1m堆積しており、褐色土(ソフトローム土)が遺構検出面である。調査区の南端は攪乱を受けていたため遺構検出面が遺存していなかった。

調査の結果、竪穴式住居9棟、掘立柱建物11棟、段状遺構1、楕円5、墳墓1基、土壇墓2基、貯蔵穴2基、落し穴6基、土壇5基、溝4条を確認した。

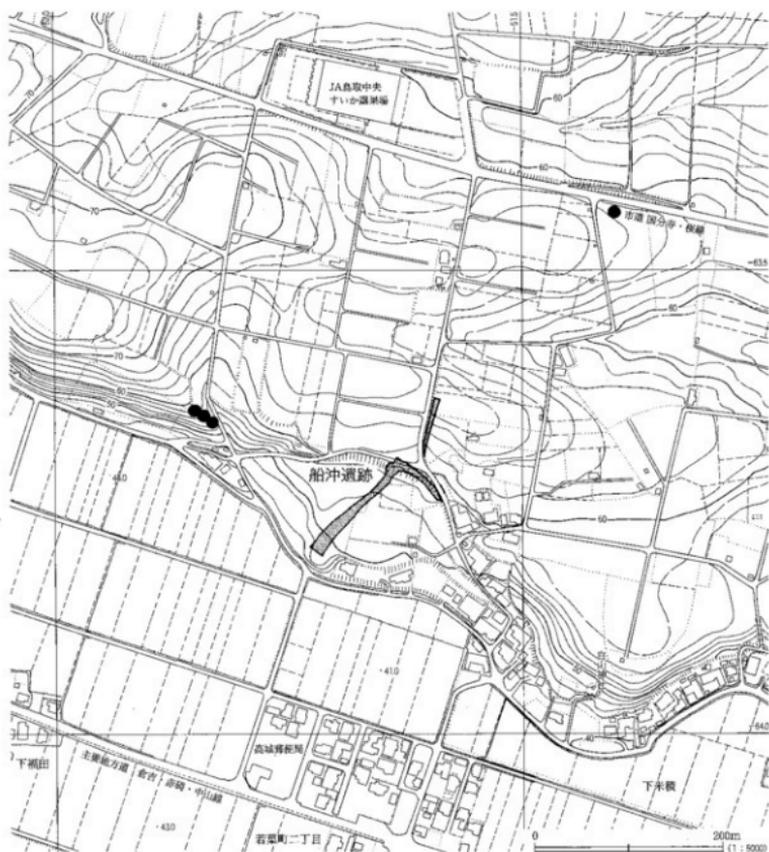
1 遺構

1号住居 調査区の南に位置する。住居の北東隅は一部調査区外となるがほぼ全体を確認した。平面形、主柱穴、土層断面により、C期→B期→A期の建て替えが考えられる。C期の床面規模は東西辺3.9m・南北辺3.84~4.0m、床面積15.2㎡で、検出面から床面までの深さは最大0.23mである。B期・A期の床面規模は東西辺3.68m、南北辺3.32mで、床面積は(12.2)㎡である。以下()は遺存値とする。平面形はC期が方形であるが、B期・A期については辺の方向がずれて南北規模が小さくなり、やや長方形となる。これに伴い、壁際中央ビットが東辺のP13から南辺P5に移動し、主柱穴は4本柱(P9~P12)から2本柱(P7・P8)となる。A期には、B期の主柱穴を埋めて再び4本柱(P1~P4)となる。壁際中央ビットは上段が浅い方形、下段が円形の二段掘りである。出土遺物は埋土中から土師器埴1が出土している。



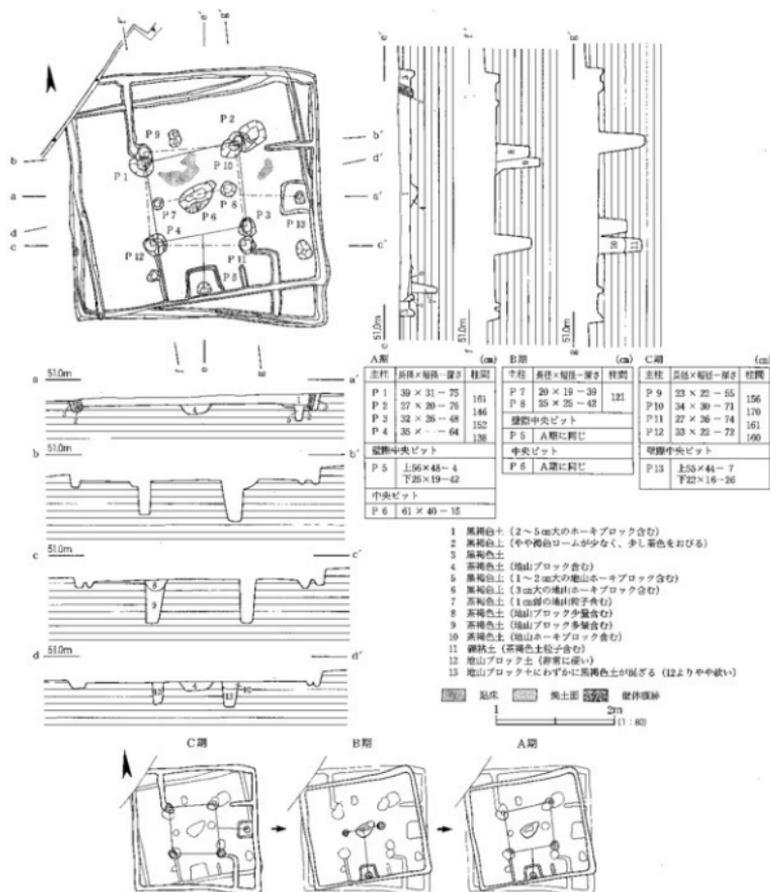
第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|------------|
| 1 勝負谷地域遺跡群 | 10 野田古墳群 | 19 福田寺遺跡2次 | 28 小谷遺跡 | 37 後口谷遺跡 |
| 2 ケンカ塚古墳群 | 11 白市遺跡 | 20 福田寺遺跡3次 | 29 下福田城跡 | 38 福木家ノ上古墓 |
| 3 雀見ヶ墓古墳群 | 12 中塚遺跡 | 21 東福田寺遺跡 | 30 阿弥大寺塚丘墓群 | 39 晚田遺跡 |
| 4 矢内谷峠遺跡 | 13 大谷後口谷墳丘墓 | 22 岩屋遺跡 | 31 下小垣遺跡 | 40 上野遺跡 |
| 5 高峰遺跡 | 14 白市竈跡 | 23 矢戸遺跡1次 | 32 高城城跡 | 41 三江城跡 |
| 6 大道谷遺跡 | 15 向野遺跡 | 24 矢戸遺跡2次 | 33 屋敷通遺跡 | 42 菅ヶ谷口たたら |
| 7 大沢前遺跡 | 16 伯耆国庁跡 | 25 観音堂遺跡 | 34 奥田遺跡 | |
| 8 両長谷遺跡 | 17 嶋ノ掛遺跡 | 26 観音堂1号墳 | 35 箕ヶ平遺跡 | |
| 9 連藤谷峯遺跡 | 18 福田寺遺跡1次 | 27 上福田横穴群 | 36 後中尾遺跡 | |



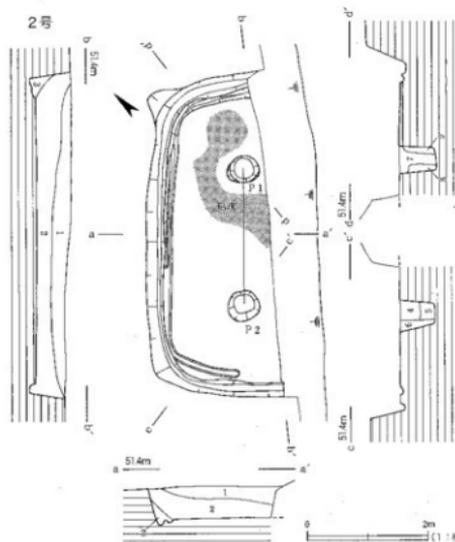
第2図 船沖遺跡調査区位置図

2号住居 調査区の南寄りに位置する。住居全体の約1/3を確認したにとどまり、東側は調査区外となる。平面形は隅丸方形と推定され、主柱穴を2本(P1・P2)確認したが、復元すると4本柱になるとみられる。周壁溝が2条巡るため、建て替えが推定されるが、土層断面観察では新旧関係は不明である。床面規模は外側周壁溝で南北辺(4.76)m・東西辺(1.84)m、内側周壁溝で南北辺(4.52)m・東西辺(1.76)m、検出面から床面までの深さは最大0.57mである。床面積は内側周壁溝で(6.9)㎡、外側周壁溝で(7.9)㎡である。P1の周辺には貼床が存在する。出土遺物は埋土中から土師器壺2・3が出土した。その他、埋土中から古墳時代前期の土師器を中心に出土した。



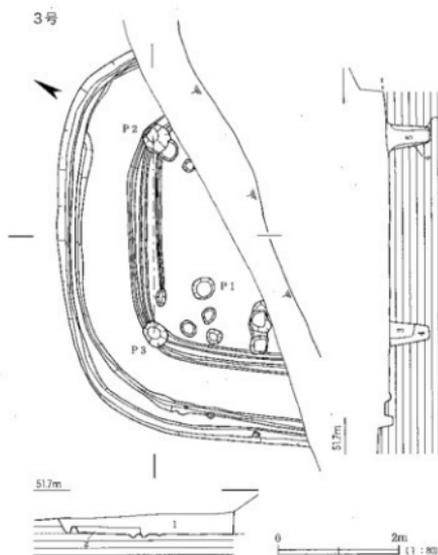
第4図 1号住居構造図

3号住居 調査区の南寄りに位置する。2号住居と同様全体の約1/3を確認したにとどまり、東側は調査区外となるが、平面形は隅丸方形とみられる。平面形、主柱穴、土層断面により、C期→B期→A期の3時期の建て替えが考えられ、そのいずれの時期も周壁溝の内側にもう1条の溝を巡らして、ベッド状遺構をなしている。C期ベッド状遺構を含めた床面規模は東西辺(2.96)m、南北辺(5.32)m、床面積(12.3)m²でベッド状遺構は幅約0.68~1.00m、検出面から床面までの深さは最大0.26mである。B期のベッド状遺構を含めた床面規模は東西辺(3.16)m、南北辺(5.40)m、床面積14.4m²でベッド状遺構は幅約1.20~1.36mである。A期のベッド状遺構を含めた床面規模は東西辺(3.16)m、南北辺(5.40)m、床面積14.4m²でベッド状遺構は幅約1.20~1.36mで床面から0.11m高く



(cm)		
主柱	長さ×幅×深さ	柱間
P 1	55 × 44 - 62	236
P 2	54 × 48 - 59	

- 1 黒褐色土 (地山ブロック少量含む)
- 2 黒褐色土 (地山ブロック多量含む)
- 3 赤茶褐色土 (しまりが悪い)
- 4 黒褐色土 (地山ブロック粒子含む)
- 5 暗褐色土 (地山ブロック多量を含む)
- 6 ホーキ・ATの腐じり土 (しまりが悪い)
- 7 赤褐色土 (地山1cm大ブロック含む)
- 8 腐植土とホーキの腐じり土
- 9 黒褐色土 (AT・ホーキブロック多量を含む)

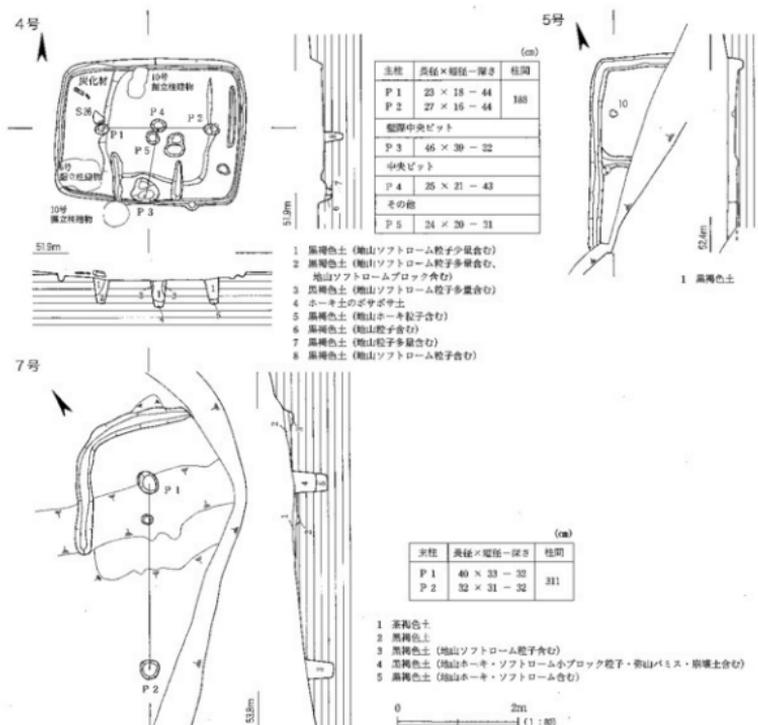


A期・B期 (cm)		
主柱	長さ×幅×深さ	柱間
P 1	37 × 35 - 51	

C期 (cm)		
主柱	長さ×幅×深さ	柱間
P 2	45 × 40 - 71	331
P 3	44 × 35 - 65	

- 1 黒褐色土 (地山粒子含む)
- 2 黒褐色土 (地山粒子・ブロック多く含む)
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土 (地山ホーキブロック多く含む)
- 5 黒褐色土 (地山ホーキブロック含む)

第5図 2号・3号住居遺構図



第6図 4号・5号・7号住居遺構図

なることが断面図によって分かる。主柱穴はP2・P3がC期に伴い、P1がB期・A期に伴うとみられる。遺物は、埋土中から土師器甕4～7・鼓形器台8が出土している。

4号住居 調査区のほぼ中央に位置する。平面形は東西に長い剛丸長方形である。床面規模は、東西辺2.88m、南北辺2.16mで、検出面から床面までの深さは最大0.22mである。主柱穴はP1・P2の2本柱でその内側は正方形に約0.04m低くなり、中央ビットP4と南辺中央に壁際中央ビットP3が存在する。P4に隣接してP5があり、東辺周壁溝の内側にも辺に並行して溝があるため建て替えの可能性がある。遺物はP1に接して台石S26が、北東隅で炭化材が出土した。また、埋土中から土師器甕9が出土した。

5号住居 調査区の中央に位置する。平面形は、大半が調査区外になるため全容は不明であるが、方形になると推定される。確認できた規模は南北辺(3.08)m、東西辺(0.92)m、検出面から床面までの深さは最大0.18m、床面積は(1.5)m²である。主柱穴は調査区内では確認できなかった。西辺中央付近の周壁溝から直角に溝が延びる。遺物は、床面で土師器碗10が底部が上になった状態で出土した。

6号住居 調査区の中央に位置する。平面形は南辺の周壁溝が未検出であるが方形であるとみられる。平面形、主柱穴、土層断面により、B期→A期の建て替えが考えられる。B期の床面規模は、東西辺5.40m、南北辺

(4.72)m、床面積(23.4)㎡、主柱穴はP 8～P11で中央ビットがP13、方形で2段掘りの壁際中央ビットがP12、検出面から床面までの深さは最大0.87mである。A期の床面規模は東西辺6.20m、南北辺(6.24)m、床面積(35.6)㎡、主柱穴はP 1～P 4、中央ビットがP 7、壁際中央ビットがP 6である。P 5は長方形の掘り方で、壁際中央ビットP 6の中軸線上にあり、P 6と関連する可能性がある。遺物は、埋土中から土師器壺11、高坏12・13が出土した。その他埋土中から、風子硯39や土師器(平安時代)、緑釉陶器片、黒色土器片が出土した。

7号住居 調査区の中央に位置する。大半が調査区外となっており、且つ斜面の低い方側には、褐色土まで住居が掘り込まれていない。平面形はやや丸みのある角の部分があるため、多角形または隅丸方形・隅丸長方形とみられる。検出面から床面までの深さは最大0.21mである。主柱穴はP 1・P 2の2本を確認したにとどまる。遺物は出土していない。

8号住居 調査区の東隅に位置する。平面形は南西側が調査区外となっているが、復元すると長方形と推定される。床面規模は南北辺4.16m、東西辺(2.80)m、床面積(10.8)㎡で、東西辺は復元すると約4.7mとなる。検出面から床面までの深さは最大0.70mである。主柱穴はP 1を確認しており、2本柱が想定される。南辺には壁際中央ビットP 3があり、長方形で2段掘りとなる。P 2は長方形の掘り方で、壁際中央ビットP 3の中軸線上にあり、P 3と関連する可能性がある。住居中央から壁際中央ビットのある南辺は、床面が長さ2.6m×幅(1.0)mの長方形に0.03～0.06mの浅い掘り込みがある。掘り込み内側の中央ビットP 4周辺は焼土面が広がる。遺物は床面から土師器壺18、壁際中央ビットP 2埋土中から土師器壺15、埋土中から土師器壺14、壺15・16、高坏19、北東隅床面から敲石S 2が出土した。

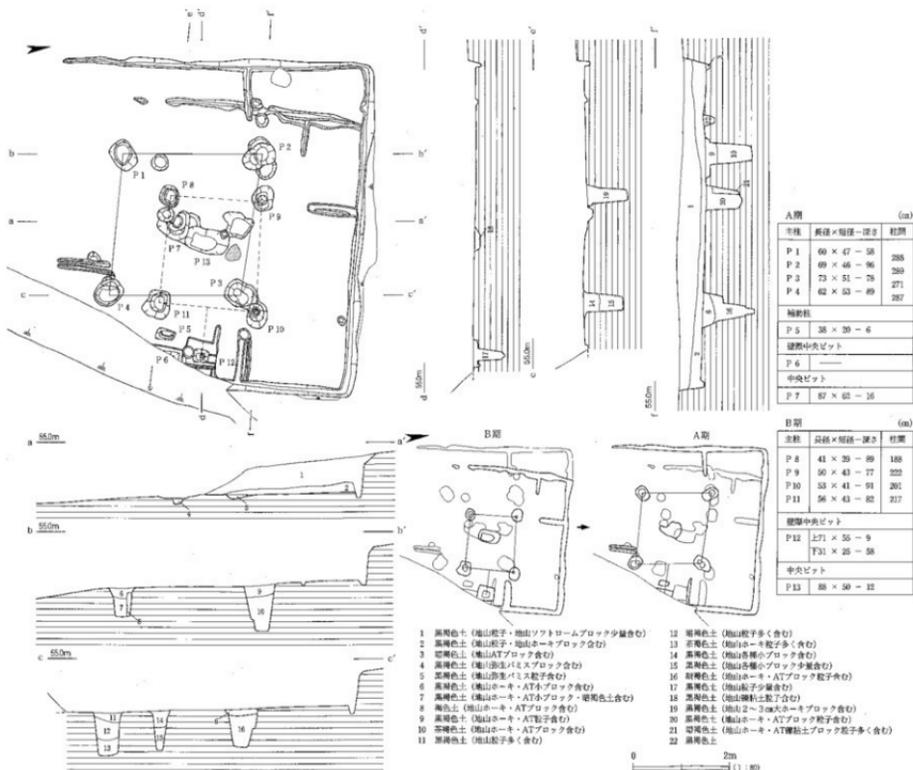
9号住居 調査区の北東隅に位置し、8号住居に隣接する。平面形はやや台形気味であるが、南西に長い長方形になる。床面規模は東西辺3.06m、南北辺2.24～2.57m、床面積7.4㎡、検出面から床面までの深さは最大0.70mで貼り床が存在する。主柱穴はP 1・P 2の2本柱でP 6が中央ビットである。主柱穴から南辺にある円形の壁際中央ビットP 5にかけて、長方形の長さ1.62m×幅1.08m、深さ0.04～0.08mの掘り込みがある。遺物は床面から土師器小型丸底壺20、壁際中央ビットP 5埋土中から硯石S 43、埋土中から土師器高坏21～23が出土した。

1号掘立柱建物 調査区の南端近くに位置し4号掘立柱建物に隣接する。主軸はN-14°-Eで、桁行2間×梁行2間の建物である。棟持柱は他の柱穴に比べ浅く北に柱がずれ、柱間がまちまちである。建て替えが、平面形、土層断面から確認された。建て替え前は桁側全体を幅約0.38～0.79m、深さ約0.07～0.26m布掘りした後に、柱部分をさらに掘り下げる。建て替え後は東側の桁を西に寄せて規模を縮小し、西側の桁はほぼ同じ場所ですら北に位置をずらしている。床面積は建て替え前が11.0㎡、建て替え後が10.0㎡である。桁行の長さを梁行の長さで割った長方形度(以下、長方形度と言う)は、建て替え前が1.02、建て替え後が1.13である。遺物は、ビットの埋土中から縄文時代晩期の粗製土器片、弥生時代前期の土器片2点、土師器とみられる小片が出土した。

2号掘立柱建物 調査区やや南寄りの2号住居と3号住居の間に位置する。主軸はN-31°-Eで、桁行2間×梁行1間の建物である。東隅柱穴は2段の掘り方で、下段掘り方は柱を据えたとも考えられる。床面積は13.9㎡、長方形度は1.10である。遺物はビット埋土中から土師器鼓形器片や土師器小片が出土した。

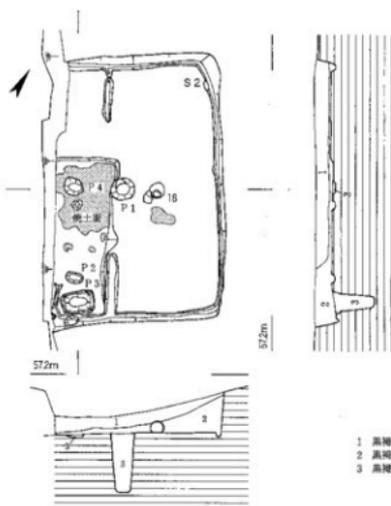
3号掘立柱建物 調査区の南端に位置する。主軸はN-2°-Wで、桁行2間×梁行2間の総柱建物である。柱穴規模は直径約0.14～0.23m・深さ約0.13～0.46mで四隅の柱が深く、その他は浅い。床面積は10.1㎡、長方形度は1.03である。遺物は、ビット埋土中から弥生時代後期の土器片、土師器の小片が出土した。

4号掘立柱建物 調査区の南端近く、1号掘立柱建物のすぐ東側に位置する。桁行2間×梁行1間の建物である。主軸は東側桁行N-9°-Eで、西側桁行N-5°-Eとずれる。床面積は10.6㎡、長方形度は1.28である。



第7図 6号住居遺構図

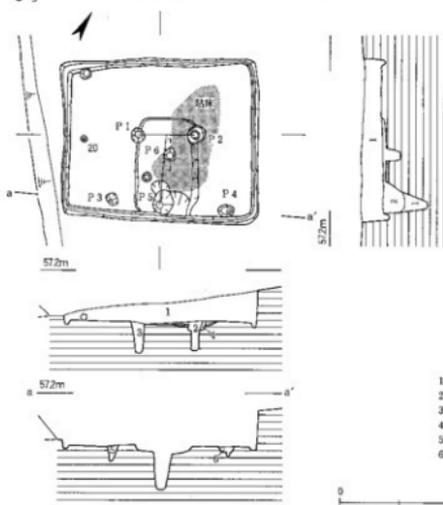
8号



主柱	長径×短径×深さ	(cm)
P 1	42 × 37 - 101	
補助柱		
P 2	30 × 24 - 5	
壁際中央ビット		
P 3	上54 × 37 - 8 下42 × 31 - 66	
中央ビット		
P 4	32 × 31 - 5	

- 1 黒褐色土 (地山ロート・AT大ブロック多く含む)
- 2 黒褐色土 (地山砂子含む)
- 3 黒褐色土 (地山ロート小ブロック含む)

9号

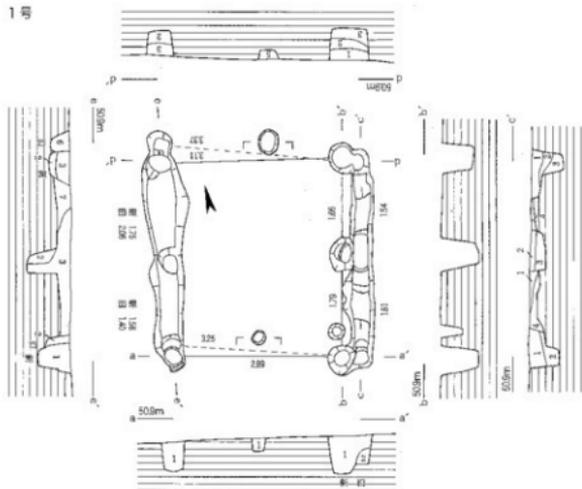


主柱	長径×短径×深さ	柱間	(m)
P 1	34 × 21 - 53		
P 2	上30 × 27 - 11 下15 × 14 - 35	94	
補助柱			
P 3	30 × 17 - 28		
P 4	26 × 21 - 16		
壁際中央ビット			
P 5	39 × 31 - 64		
中央ビット			
P 6	21 × 18 - 23		

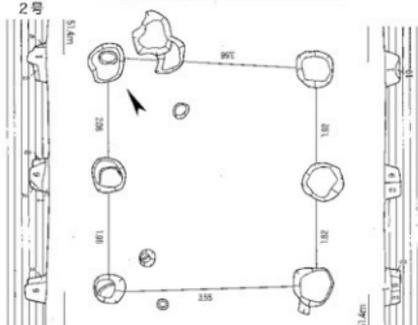
- 1 黒褐色土 (地山砂子・ブロック含む)
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土 (地山小ブロック含む)
- 4 茶褐色土
- 5 黒褐色土 (地山砂子含む、地山ブロック少量含む)
- 6 黒褐色土 (地山2~3cm大ブロック多く含む)

第8図 8号・9号住居遺構図

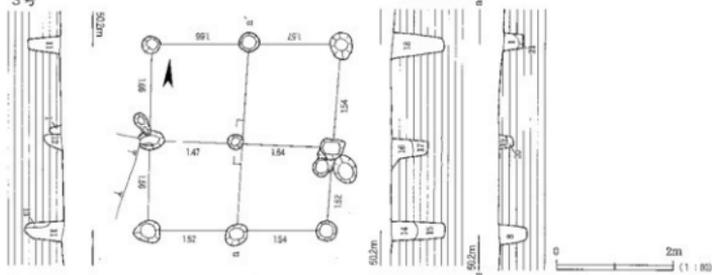
1号



2号

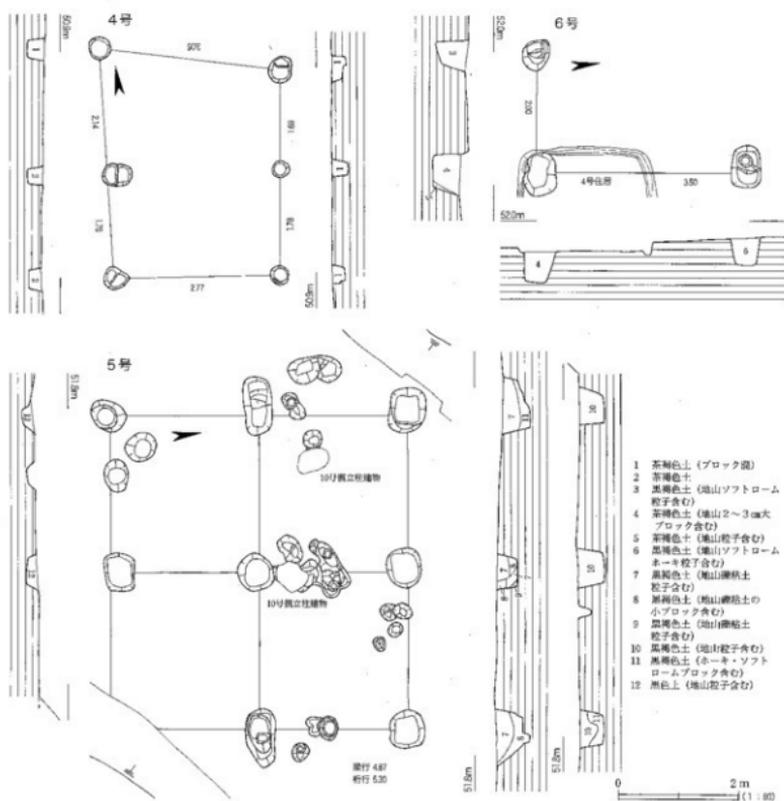


3号



- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 (地山ブロック多く含む)
- 3 黒褐色土 (地山ブロック少量含む)
- 4 暗黄褐色土 (地山ホーキ土ブロックと茶褐色土の混じり上)
- 5 茶褐色土 (地山粒含む)
- 6 茶褐色土
- 7 黒山ブロックと砂子と茶褐色土の混じり土
- 8 茶褐色土 (地山粒を含む)
- 9 黒褐色土 (地山粒少量含む)
- 10 茶褐色土 (地山ホーキブロック多く含む)
- 11 黒褐色土 (地山ホーキ粒を含む)
- 12 黒褐色土 (地山ホーキブロック含む)
- 13 黒褐色土 (地山ホーキ粒子・ソフトローム粒を含む)
- 14 黒褐色土 (地山ソフトローム・ATホーキ土・AT粒を含む)
- 15 茶褐色土 (地山ソフトローム粒を含む)
- 16 黒褐色土 (地山ホーキ土少量含む)
- 17 黒褐色土 (AT・ソフトロームブロック含む)
- 18 黒褐色土 (地山ソフトローム・ホーキブロック含む)
- 19 茶褐色土 (地山ホーキ土含む)
- 20 ホーキブロック (黒褐色土含む)
- 21 黒褐色土 (地山ソフトローム土多く含む)

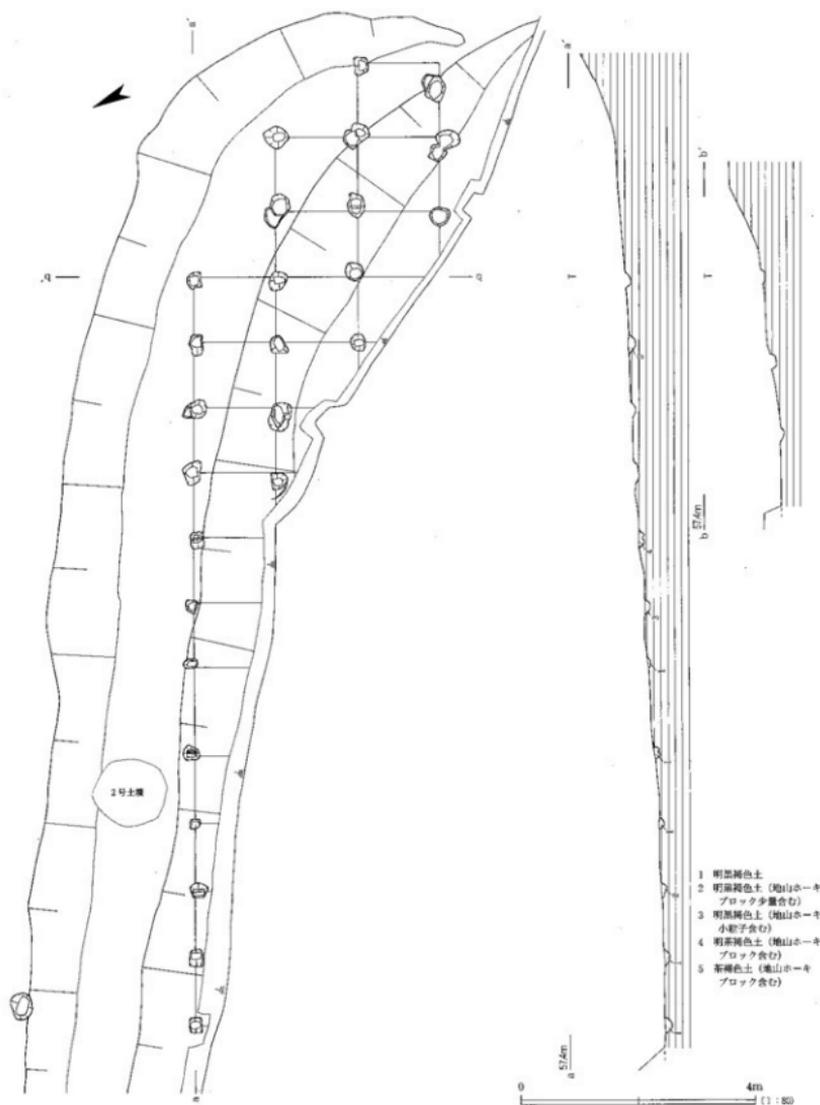
第9図 1号～3号掘立柱建物遺構図



第10図 4号～6号掘立柱建物遺構図

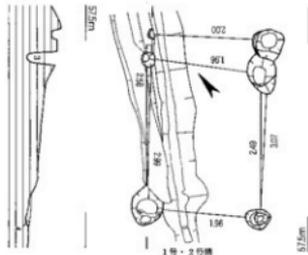
5号掘立柱建物 調査区のほぼ中央、3号住居と4号住居の間で10号掘立柱建物と重複し、南東隅の柱は調査区外となる。主軸はN-8°-Eで、桁行2間×梁行2間の総柱建物である。床面積は(26.0)㎡、長方形では1.06である。遺物は、ピット埋土中から弥生時代前期の土器片、土師器甕・高坏・器台・低脚坏脚部のいずれも小片が出土した。

6号掘立柱建物 調査区のほぼ中央、5号掘立柱建物の北辺から約1m北に位置する。北側が調査区外となり東西1間、南北1間分の柱穴3つを確認しているだけである。南東隅の柱は4号住居と切り合っており、住居の床面で貼り床面や硬化面がないため掘立柱建物の方が新しいと見られる。南北のピット方向はN-4°-Eで、東側2つの穴の平面形は東西に長く、南東の柱穴底面はやや瓢箪形になる。遺物はピット埋土中から二重口縁の土師器甕小片が3点出土した。

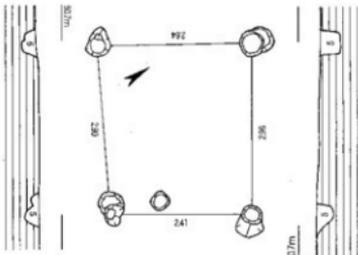


第11図 7号掘立柱建物遺構図

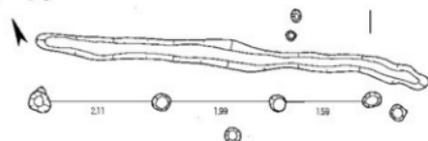
8号



11号



9号

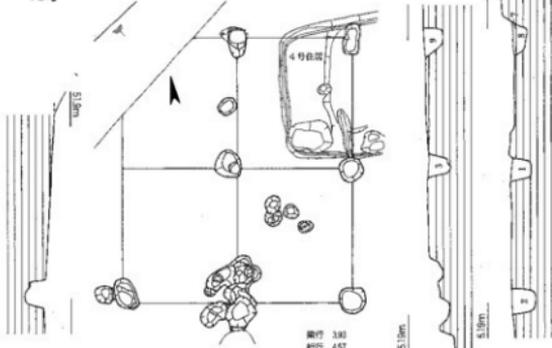


57.1m



- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 (地山ホークキップ
ブロック含む)
- 3 黒褐色土 (地山粒子含む)
- 4 茶褐色土 (地山粒子含む)
- 5 茶褐色土
- 6 茶褐色土 (ブロック混ざる)
- 7 黒褐色土 (茶褐色土
含む・地山ホークキップ
含む)
- 8 黒褐色土 (地山ソフト
ローム小ブロック含む)
- 9 地山ソフトローム粒子
含む

10号



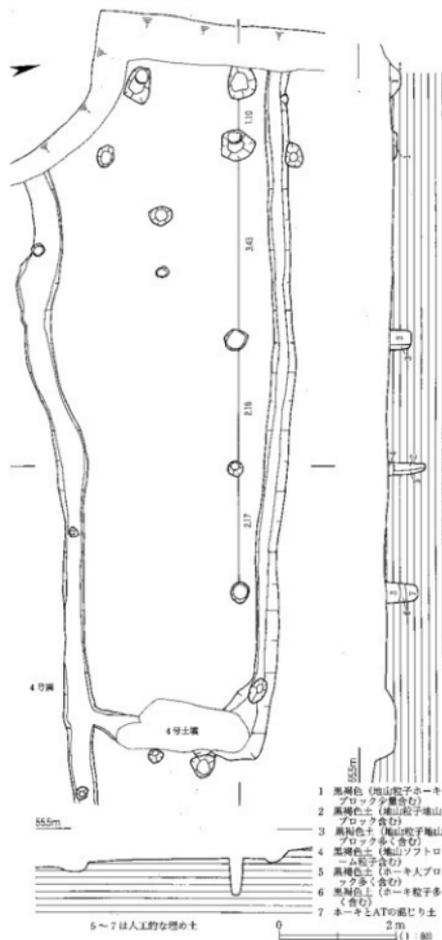
4号土床

幅 4.57

奥行 4.57

0 2m
1 : 80

第12図 8号~11号掘立柱建物遺構図



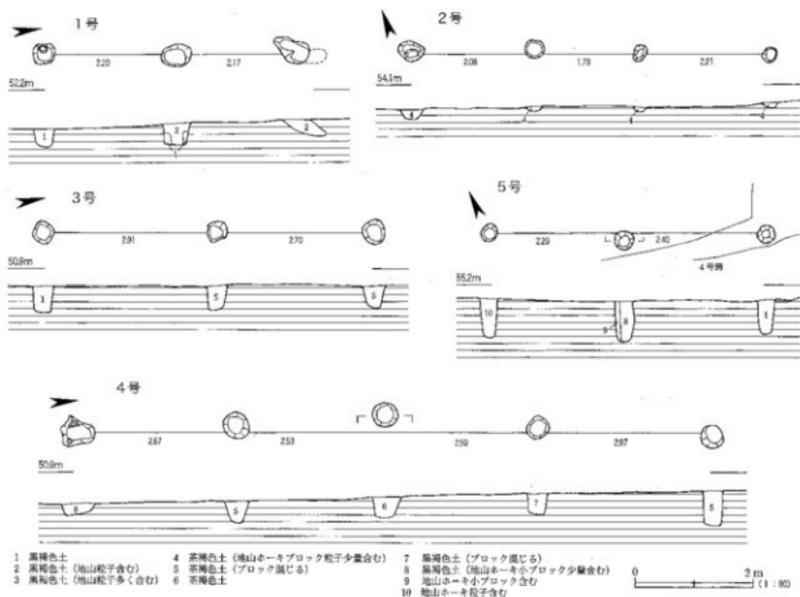
第13図 1号段状遺構遺構図

10号掘立柱建物 調査区のほぼ中央に位置し、5号掘立柱建物と重複し、北西隅の柱は調査区外になる。北東隅の柱は4号住居と切り合っており、住居の床面で貼り床面や硬化面がないため掘立柱建物の方が新しいと見られる。主軸は $N-9^{\circ}-E$ 、床面積は(17.1)㎡である。桁行2間×梁行2間の総柱建物である。長方形度は1.16である。遺物は出土しなかった。

7号掘立柱建物 調査区の北東、南斜面に位置する。全体規模は南側が調査区外のため不明であるが、東西方向に14間(16.5m)、南北3間分(4.2m)と長大である。床面積は(24.0)㎡である。東端は北側の2間分が無く、その西側2間は北側1間分が無い。柱間は東西方向が場所によって異なり約1.1m~1.5mであるのに対し、南北は約1.4mと均一である。柱穴規模は0.3~0.4mで、深さが最大で約0.1mと浅い。建物北側は斜面の高い側を削った段差が続き、建物東端で斜面の低い側に回って終わる。したがって斜面造成後に掘立柱建物を建てたとも考えられるが、西側には削った段差が回らない。遺物は全く出土しなかった。

8号掘立柱建物 調査区北東の南斜面、7号掘立柱建物の東に位置する。桁行1間×梁行1間の建物で、平面形から南側梁行は同じ位置で北側梁行を建て替える。南側建物が主軸は $N-42^{\circ}-E$ 、長方形度は1.26で北側建物の主軸が $N-39^{\circ}-E$ 、床面積は5.2㎡と6.0㎡、長方形度は1.52である。建物の新旧関係は不明である。遺物はビット埋土中から須恵器甕の体部片と土師器低脚杯の脚部片が出土した。

9号掘立柱建物 調査区中央の斜面に位置する。桁行の北側3間分を確認したが、梁行は南側斜面の低い側については遺構検出面まで掘り込まれていないため確認できなかった。桁行の北側に柱穴にほぼ並行して、雨落ち溝とみられる長さ約6.8m×幅約0.4mの浅い溝が走る。主軸は $N-68^{\circ}-W$ である。遺物は出土しなかった。



第14図 1号～5号櫛列遺構図

11号掘立柱建物 調査区の南端に位置する。桁行1間×梁行1間の建物である。主軸はN-32°-Eである。床面積は7.4㎡、長方形度は1.15である。遺物は出土しなかった。

1号段状遺構 調査区中央の斜面、6号住居のすぐ北に位置する。斜面の高い側を削り、幅約0.4mの浅い溝を北と東に設け、平坦地を区画する。平坦地は東西方向の溝に並行してピットが直線的に5つ並ぶ。ピットは東側の3つが等間隔で西側の2つとは合わないが平坦地が調査区外まで延びるためどのように展開するかは分からない。南側は4号溝と切り合うが新旧関係は不明である。遺物は埋土中から土師器片、須恵器片が出土した。

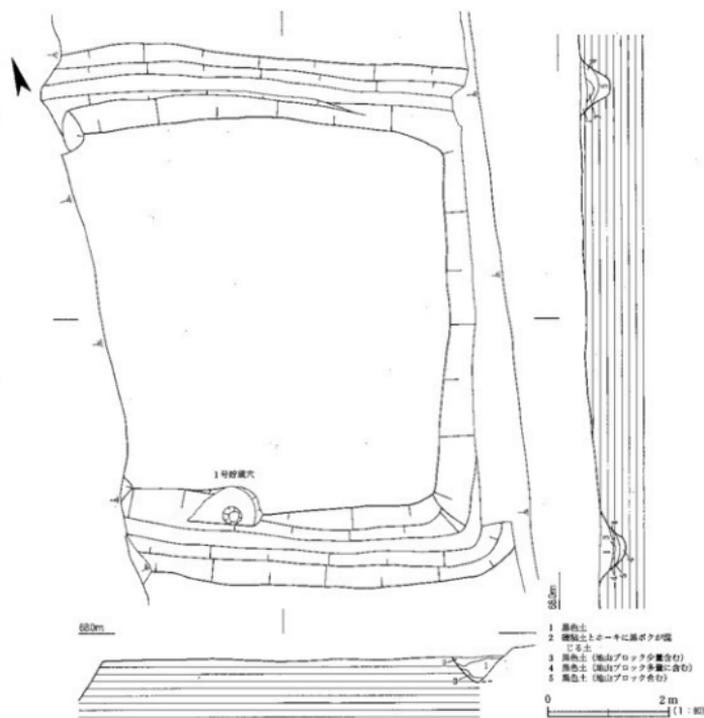
1号櫛列 調査区のほぼ中央、4号住居の東側に位置する。主軸の方向はN-8°-Eで、中央のピットは柱痕跡が断面から確認され、北端のピットは北側に伏れる。遺物はピット埋土中から土師器(古墳時代)の小片が出土した。

2号櫛列 調査区中央、6号住居の南に接して位置する。主軸の方向はN-69°-Wで、ピットの深さは0.1m程で浅い。遺物は出土しなかった。

3号櫛列 調査区の南、4号掘立柱建物の主軸とほぼ並行して東約1.5mに位置する。主軸の方向はN-11°-Eである。遺物は出土しなかった。

4号櫛列 調査区の南に位置し、4号溝と切り合うが新旧関係は不明である。主軸方向はN-65°-Wである。遺物は出土しなかった。

5号櫛列 調査区の中央に位置し、北側が1号段状遺構、南側が4号溝と切り合う。新旧関係は1号段状遺構・4号溝の方が新しい。櫛列の方向はN-6°-Eである。遺物は出土しなかった。



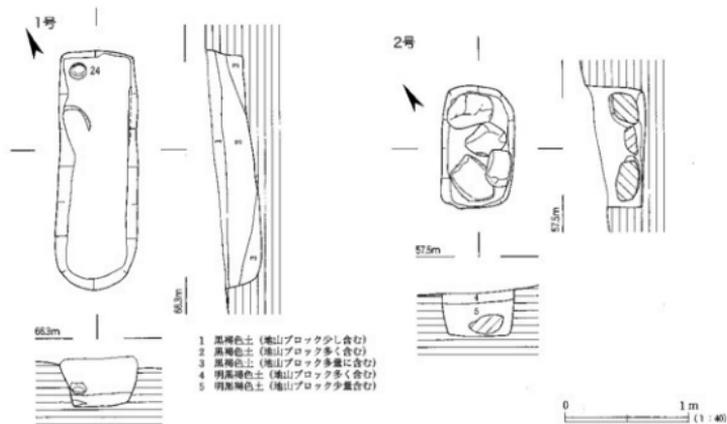
第15図 1号墳墓遺構図

1号墳墓 調査区北端の丘陵頂部付近に位置する。平面形は西側が現在の道路によって削られ、東側の一部が調査区外となるが、方形とみられる。墳丘及び主体部は畑地化されており遺存しない。周溝を含めた規模は東西(7.0)m、南北8.8m、周溝規模は幅約1.6m・深さ約0.6mで断面はV字形である。遺物は周溝の埋土中から土師器小片がわずかに出土した。

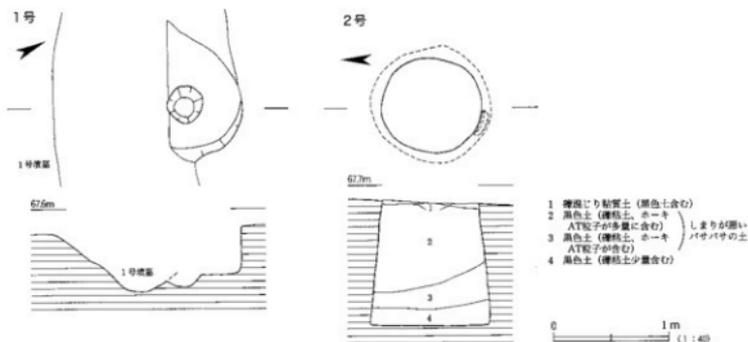
1号土墳墓 調査区北の南斜面に位置する。平面形は長方形で、南側は角がやや丸くなる。長さ1.94m・幅0.66m・深さ0.32mである。底面は北小口が南小口に比べ約0.16m高い。木棺痕跡は確認できなかった。北小口底面で副葬品の土師器坏24がほぼ正立した状態で完形で出土した。

2号土墳墓 調査区東の斜面に位置する。平面形は隅丸長方形で、長さ0.98m・幅0.58m・深さ0.56mである。土壇内から直径0.3~0.4m・厚さ0.1~0.2m程度の石が4個出土した。遺物は埋土中から土師器、須恵器の小片が1点ずつ出土した。

1号貯蔵穴 調査区北端の丘陵頂部、1号墳墓の周溝南辺に位置する。南半分は1号墳墓の周溝によって切られており、遺存しない。底面規模は長径0.95m・深さ0.42mで、底面中央に杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径0.32m・深さ0.11mである。遺物は出土しなかった。



第16図 1号・2号土墳墓遺構図

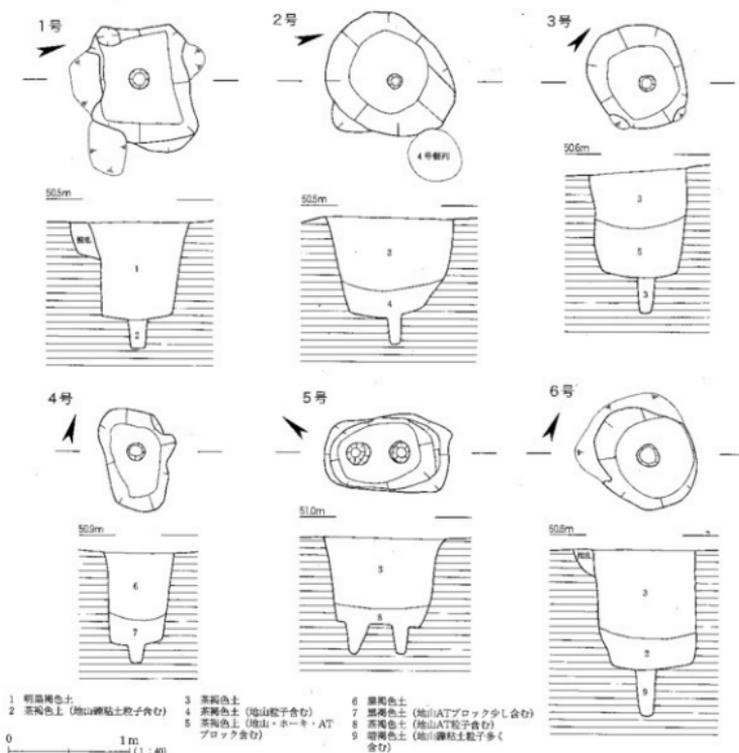


第17図 1号・2号貯蔵穴遺構図

2号貯蔵穴 調査区北端の丘陵頂部、1号墳墓の中央に位置する。平面形はほぼ円形で検出面規模は0.87m×0.82m、底面規模は1.05m×1.02m・深さ1.11mと底部の方が広がる。遺物は出土しなかった。

1号落し穴 調査区南側に位置する。平面形は検出面・底面とも方形、断面形はすぼまり形である。検出面規模は1.06m×0.87m・深さ0.82m、底面規模は0.77m×0.64mである。底面中央に杭痕跡と考えられるビットが1個存在する。杭痕跡は短径0.16m・深さ0.24mである。遺物は出土しなかった。

2号落し穴 調査区南側、1号落し穴の北約2mに位置する。平面形は検出面で楕円形、底面で円形となる。断面形はすぼまり形である。検出面規模は1.14m×0.92m・深さ0.83m、底面規模は0.66m×0.64mである。底面やや東寄りに杭痕跡と考えられるビットが1個存在する。杭痕跡は短径0.12m・深さ0.25mである。遺物は出土しなかった。

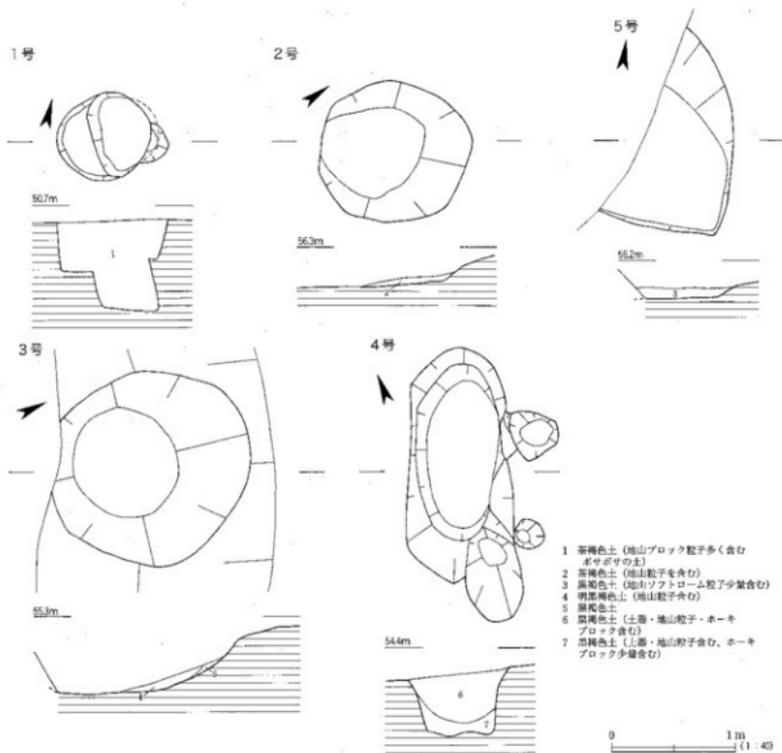


第18図 1号～6号落し穴遺構図

3号落し穴 調査区南側、1号掘立柱建物の南に約2m離れて位置する。平面形は検出面で楕円形、底面で円形となる。断面形はすばまり形である。検出面規模は $0.90\text{m} \times 0.77\text{m}$ ・深さ 0.91m 、底面規模は $0.60\text{m} \times 0.55\text{m}$ である。底面やや東寄りに杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径 0.14m ・深さ 0.29m である。遺物は出土しなかった。

4号落し穴 調査区南側、1号住居の南東約5mに位置する。平面形は検出面・底面とも不整な楕円形である。断面形はすばまり形である。検出面規模は $0.83\text{m} \times 0.60\text{m}$ ・深さ 0.78m 、底面規模は $0.64\text{m} \times 0.41\text{m}$ である。底面やや東寄りに杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径 0.14m ・深さ 0.29m である。遺物は出土しなかった。

5号落し穴 調査区南側、4号落し穴の北約7mに位置する。平面形は検出面・底面とも楕円形で、断面形はすばまり形である。検出面規模は $1.02\text{m} \times 0.66\text{m}$ ・深さ 0.91m 、底面規模は $0.67\text{m} \times 0.50\text{m}$ である。底面に杭痕跡と考えられるピットが2個存在する。杭痕跡は短径 0.20m ・深さ 0.26m と短径 0.17m ・深さ 0.24m である。遺物は出土しなかった。



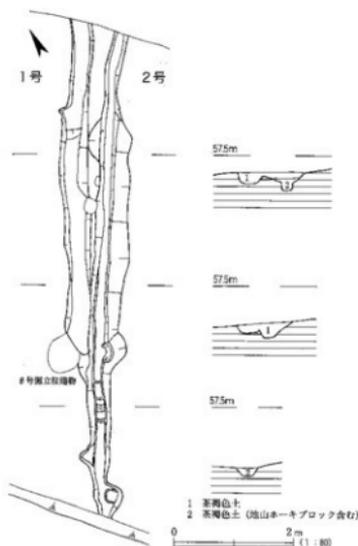
第19図 1号～5号土壌遺構図

6号落し穴 調査区南側、3号落し穴の北約5mに位置する。平面形は検出面で楕円形、底面で円形となる。断面形は垂直形である。検出面規模は0.92m×0.81m・深さ0.98m、底面規模は0.65m×0.64mである。底面やや西寄りに杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径0.19m・深さ0.39mである。遺物は出土しなかった。

1号土壌 調査区南側に位置する。平面形は楕円形で、2段に掘り込まれる。検出面規模は0.76m×0.69m・深さ0.75m、底面規模は0.58m×0.46mである。埋土はしまりがなく、遺物は出土しなかった。

2号土壌 調査区東の南斜面に位置する。平面形は不整形、断面形は凹レンズ状になる。検出面規模は1.27m×1.16m・深さ0.12mで、底面規模は0.83m×0.73mである。遺物は出土しなかった。

3号土壌 調査区中央の南斜面に位置する。平面形は不整形、断面形は凹レンズ状になり、2号土壌とよく似ている。検出面規模は1.68m×1.44m・深さ0.47m、底面規模は0.90m×0.86mである。遺物は埋土中から土師器（平安時代）小片が出土した。



第20図 1号・2号溝遺構図

深さ0.10mで中央付近は削平によって途切れがちになる。断面形は開いたU字形である。遺物は出土しなかった。

4号溝 調査区中央、3号溝と同様斜面の傾きに並行して位置し、溝の両端は調査区外に延びる。規模は長さ13.2m・幅0.68m・深さ0.07mで、溝の西半分は若干蛇行する。遺物は埋土中から土師器片（平安時代）、須恵器片が出土した。

2 遺物

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石製品がある。遺構に伴う土師器を中心に図化し、説明は表に一括した。図化はしてないが、遺構外から弥生土器・土師器・須恵器が出土している。（図版8・9）弥生土器前期の遺物が遺構外から出土した。壺形土器25は口縁部と頸部の境目に削り出しの段を持ち、前期前半と推定される。壺形土器は他に体部～底部片26・27、口縁部片30、底部34・35がある。甕形土器は口縁部外面に刻みを持つ壺28・29・33、刻み目凸帯文土器31・32が出土した。刻み目凸帯文土器は断面三角形の凸帯を張り付け、凸帯部と端部に刻み目が巡る。胎土、焼成、調整から弥生土器と考えられる。土師器杯B36・37は伯耆国庁第2段階（SK-05）に比定され、37は焼成後底部穿孔を施す。須恵器高環38は坏部片でTK73に比定される。

石製品は遺構に伴う遺物と、その他の包含層から出土した遺物のうち代表的なものを図化してそれ以外は表のみとした。凹石、敲石、磨石の名称は複数の使用痕がある場合、①凹み、②敲き、③磨りの順に優先して、下位の使用痕は表の備考で記述した。

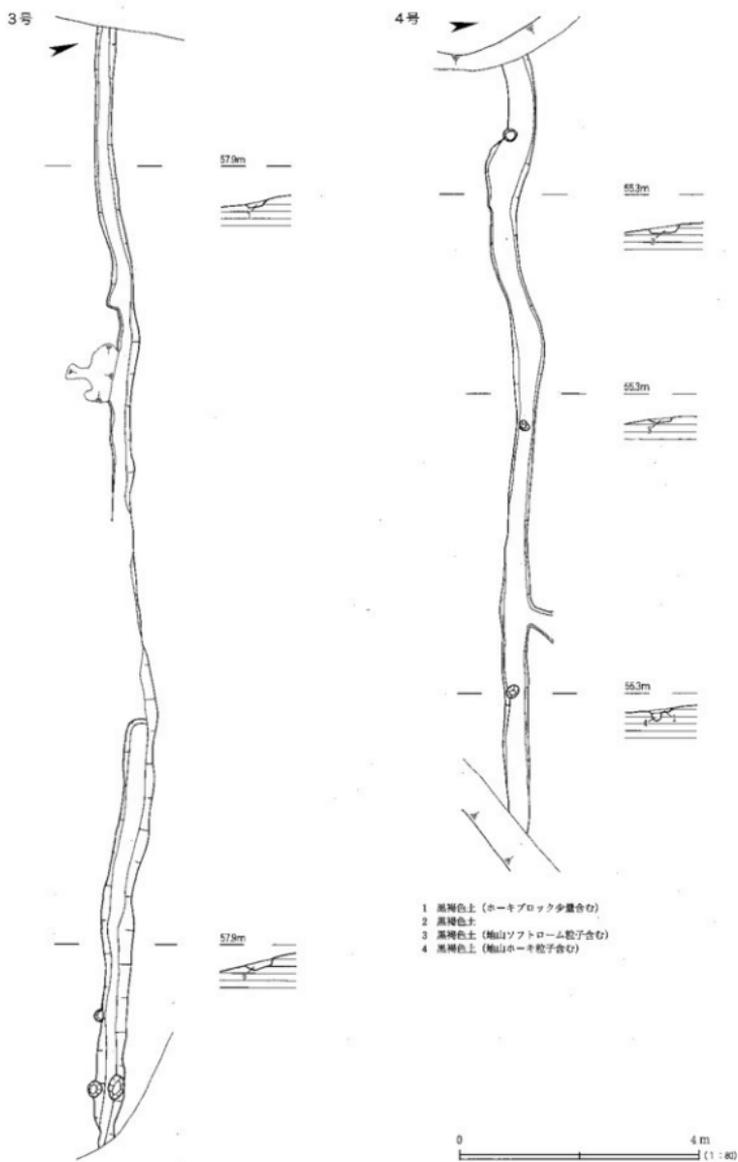
4号土壌 調査区中央、1号段状遺構の東側溝と土壌東側肩がほぼ同じであるが、別遺構とした。平面形は楕円形で、検出面規模は1.93m×0.86m・深さ0.57m、底面規模は1.20m×0.59mである。遺物は埋土中から土師器片（平安時代）、須恵器片が出土した。

5号土壌 調査区中央、6号住居の西に位置し、西側が調査区外となる。平面形は不整形で、検出面規模は1.65m×0.90m・深さ0.09m、底面規模は1.11m×0.86mである。遺物は出土しなかった。

1号溝 調査区東、斜面に沿って北東から南西に直線的に延びており、2号溝と並行する。北東側は調査区外に広がる。長さ5.6m・幅0.50m・深さ0.40mである。断面形はU字形である。遺物は出土しなかった。

2号溝 調査区東、1号溝と並行して東側に直線的に延びる。北東、南西の端は調査区外に広がる。規模は長さ8.28m・幅0.60m・深さ0.18mである。断面形は開いたV字形である。遺物は須恵器甕の小片が2点出土した。

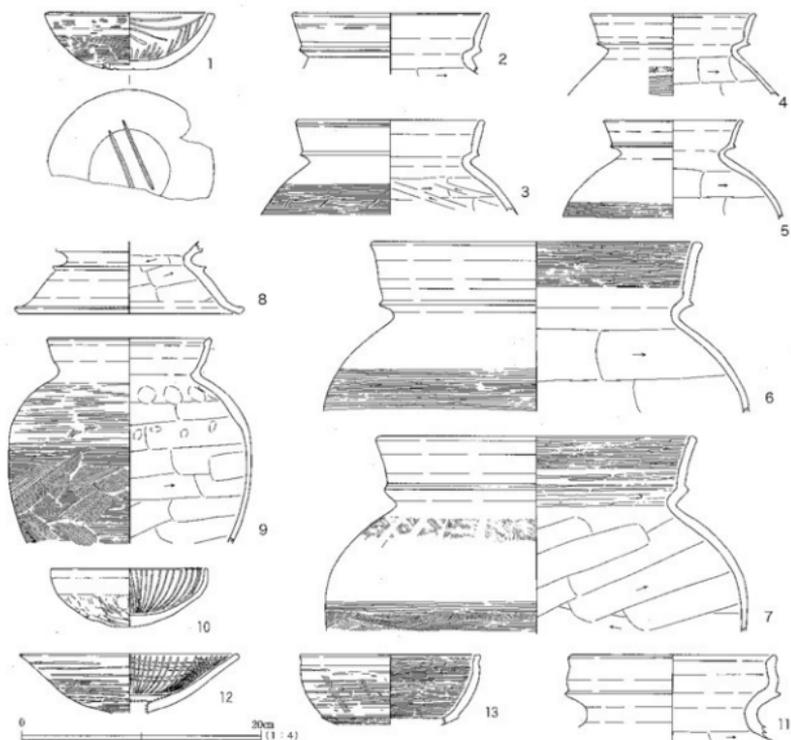
3号溝 調査区中央、斜面の傾きに並行して位置し、溝の両端は調査区外に延びる。規模は長さ18.0m・幅0.56m・



第21図 3号・4号溝遺構図

土器・土製品観察表

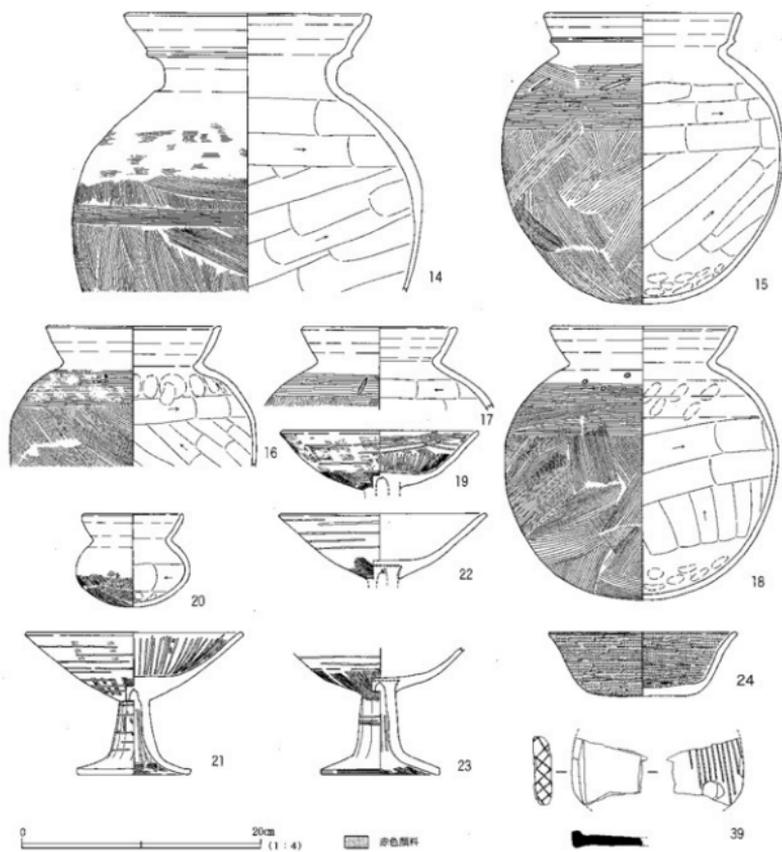
						[法庫] [種定価]	
出土位置	No	器種	法庫(cm)	形 態	手 法	胎土 胎色 色澤	遺存度
1号住居 埋土	1	甕	口径 13.3	体部は内傾しながら外方に開き、口縁部は丸くおさまる。一部はコナデにより凹線状になる。器部外面に焼成後の2条の筋状有り。	外面ハケメ後、口縁部コナデ。内面底部放射状のヘラミギキ、口縁部縦方向のヘラミギキ。	1m大の砂粒含む。焼成良好。赤褐色。口縁部外面に條付着。口縁部~底部1/2遺存。	
2号住居 埋土	2	甕	口径 (15.0)	口縁部は上方へ傾く二重口縁。肩部は丸くおさまる。器曲部は横方向に引き出す。	口縁部外面磨き洗顔をナゲテ。肩部内面横方向のヘラミギキ。	1~3m大の砂粒含む。焼成良好。淡茶褐色。口縁部外面に條付着。口縁部~肩部1/7遺存。	
	3	甕	口径 (15.2)	口縁部は上方へ傾く二重口縁。肩部は丸くおさまる。器曲部は横方向に引き出す。肩曲部上面と口縁部外面が傾いナデにより凹線状に凹む。器部外面に筋目がある。	口縁部内外両コナデ。器部外面ハケメ後ナゲテ洗し。器部外面横方向のハケメ、内面横方向のヘラミギキ。	1~2m大の長石・石灰を含む。焼成良好。淡茶褐色。器部外面に條付着。口縁部~肩部1/7遺存。	
3号住居 埋土	4	甕	口径 (13.6)	口縁部は上方に外反する二重口縁で、口縁部内面に面をなし、丸くおさまる。器曲部はコナデにより横方向に引き出す。	口縁部内外両コナデ。器部外面横方向のハケメ後上半ナゲテ洗し。器部内面横方向のヘラミギキ。	1~3m大の砂粒含む。焼成良好。淡茶褐色。口縁部~器部上半部1/3遺存。	
	5	甕	口径 (11.2)	口縁部は上方に外反する二重口縁で、口縁部内面を丸くおさめる。器曲部はコナデにより横方向に引き出す。	口縁部内外両コナデ。器曲部上面に磨き洗顔を施す。器部外面横方向のハケメ後上半ナゲテ洗し。器部内面横方向のヘラミギキ。	1m大の長石・石灰・茶色粒子含む。焼成良好。淡茶褐色。口縁部、器部下半の外面に條付着。口縁部~器部1/4遺存。	
	6	甕	口径 (17.6)	口縁部は上方に外反する二重口縁。口縁部内面を丸くおさめる。器曲部上面に一条の筋状がある。器曲部はコナデにより横方向に引き出す。	口縁部から器部内面横方向のヘラミギキ。器部外面横方向のハケメ後ナゲテ洗し。器部内面横方向のヘラミギキ。	1~2m大の長石・石灰を含む。焼成良好。淡茶褐色。口縁部~器部上半部1/3遺存。	
埋土	7	甕	口径 (26.0) 最大口径 (35.2)	口縁部は上方に外反する二重口縁で、口縁部内面を丸くおさめる。器曲部はコナデにより横方向に引き出す。	口縁部から器部内面横方向のヘラミギキ。口縁部外面に磨き洗顔を施す一部残る。器部外面横方向のハケメ後ナゲテ洗し。器部内面横方向のヘラミギキ後ナゲテ洗す。	1~2m大の長石・石灰を含む。焼成良好。淡茶褐色。口縁部に筋状あり。口縁部~器部上半1/3遺存。	
埋土	8	散形 甕台	甕台径 (13.2)	甕台部片。大きく外反し肩部は凹面をなす。器部の縁は鋭く凹曲する。	外面コナデ。内面ヘラミギキ。	1~2m大の長石・石灰を含む。焼成良好。淡茶褐色。器台部1/4遺存。	
4号住居 埋土	9	甕	口径 (13.4) 最大口径 (20.2)	口縁部はわずかに内湾するくの字口縁で、器部内面が肥厚して面をもつ。	口縁部内外両コナデ。器部外面ハケメ調整。器部ナデ。器部内面ヘラミギキ。器部内面縦方向。	1~2m大の砂粒含む。焼成良好。黄褐色。外面に條付着。口縁部~器部1/3遺存。	
5号住居 床面	10	甕	口径 12.6 器高 4.9	体部は内傾しながら外方に開き、口縁部で直立し底部を丸くおさめる。器部外面が若干平らになる。	口縁部外面コナデ。器部外面ナゲテ洗す。一部にヘラミギキ。器部外面ナゲテ洗す。内面コナデ後輪文風のヘラミギキ。器部外面に筋のひびがある。	1~2m大の長石・石灰を含む。焼成良好。赤褐色。ほぼ完整。	
6号住居 埋土	11	甕	口径 (15.6)	口縁部は直立する二重口縁。肩部は肥厚し、内面に面をもつ。器曲部は横方向に引き出す。	口縁部、器部内外両コナデ。器部内面横方向のヘラミギキ。	1~2m大の長石・石灰を含む。焼成良好。淡茶褐色。口縁部~器部1/3遺存。	
埋土	12	高弁	口径 (18.0)	皿状の杯部。器部との接合は並し込み式。	外面横方向、内面横方向のヘラミギキ後放射状のヘラミギキで器部平削。	1~2m大の砂粒含む。焼成良好。赤褐色。杯部1/2遺存。	
埋土	13	高弁	口径 (15.0)	皿状の杯部。口縁部は内傾しながら外方に延びる。口縁部はわずかに内傾し平削面をなす。口縁部と杯部縁の間に嵌めをつくる。	外面横方向の皿ヘラミギキ、内面横方向のヘラミギキ。器部内面放射状のヘラミギキ。口縁部器部底面に嵌みナゲテ。	1m大の長石・石灰を含む。焼成良好。赤褐色。杯部1/7遺存。	
8号住居 埋土	14	甕	口径 19.7 最大口径 19.1	口縁部は外反する二重口縁。口縁部は外傾し面をもつ。	口縁部内外両コナデ。器部外面ハケメ調整。器部ナデ。器部内面ヘラミギキ。	2~3m大の長石・石灰粒を含む。焼成良好。淡茶褐色~黄褐色。器部外面と口縁部に筋状あり。口縁部~器部1/2遺存。	
P2	15	甕	口径 16.5 最大口径 23.4 器高 24.6	口縁部は外反する二重口縁。口縁部器部上面に放射状の条筋を、器部外面に筋目がある。器部は球形。	口縁部内外両コナデ。器部外面ハケメ調整。器部ナデ。器部内面低いヘラミギキ。器部表面に筋。	2~3m大の砂粒・茶色粒子を含む。焼成良好。淡茶褐色。器部外面の最大径以下に條付着。口縁部~器部1/2遺存。	
埋土	16	甕	口径 (16.4) 最大口径 (22.6)	口縁部は内湾するくの字口縁で、器部内面が肥厚して面をもつ。器部外面に筋状3條有り。	口縁部内外両コナデ。器部外面ハケメ調整。器部ナデ。器部内面低いヘラミギキ。器部表面に筋。	1m大の砂粒含む。焼成良好。赤褐色。口縁部~器部上半部1/3遺存。	
埋土	17	甕	口径 (12.6)	口縁部はわずかに内湾するくの字口縁で、器部内面が肥厚して面をもつ。器部外面に筋目をもつ。	口縁部内外両コナデ。器部外面ハケメ調整。器部ナデ。器部内面低いヘラミギキ。	1m大の砂粒含む。焼成良好。淡茶褐色。口縁部~器部1/2遺存。	
8号住居 床面	18	甕	口径 15.2 最大口径 22.8 器高 23.1	口縁部はわずかに内湾するくの字口縁で、器部内面が肥厚して面をもつ。器部外面に筋状3條有り。器部は球形。	口縁部内外両コナデ。器部外面ハケメ調整。器部ナデ。器部内面低いヘラミギキ。器部、器部に筋調整。器部は筋調整後ナゲテ。	1m大の砂粒含む。焼成良好。淡茶褐色。器部外面の最大径以下に條付着。ほぼ完全。	



第22図 1号～6号住居出土遺物

(括弧)は推定値

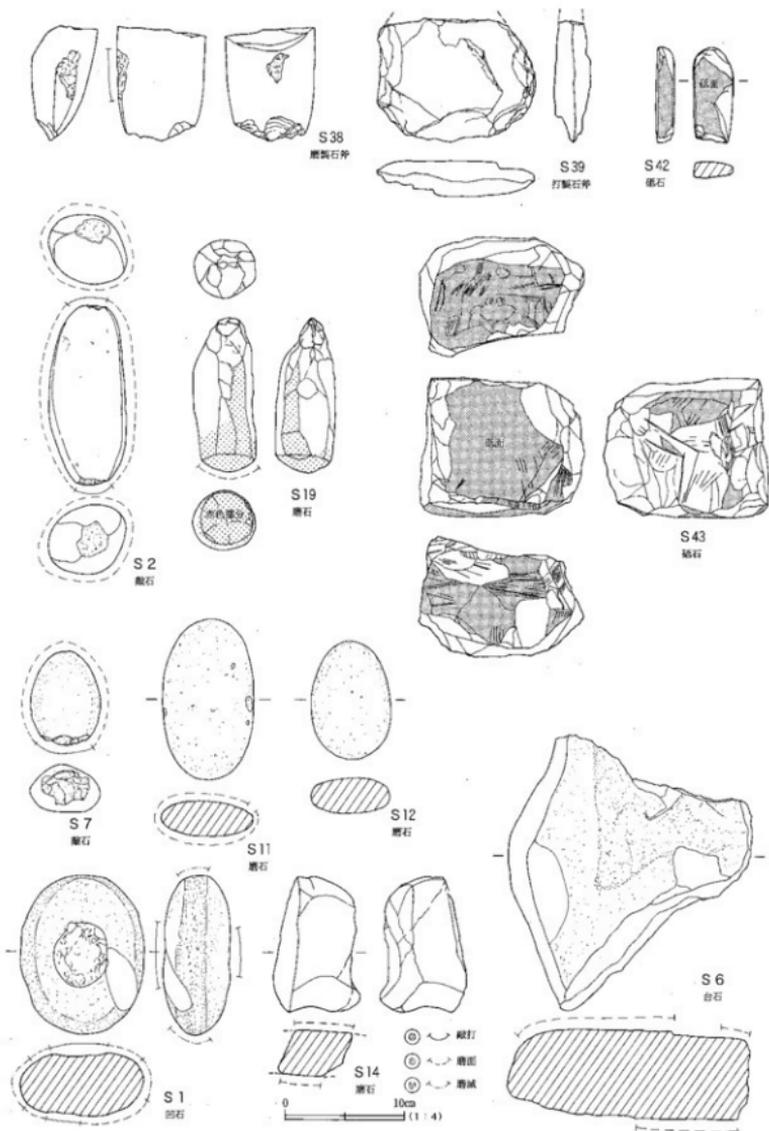
出土位置	No	器種	法量(cm)	形 態	子 迹	土質・焼成色・遺存度
埋土	19	高杯	口径 16.3～16.6	皿状の杯部、口径端部角張り外側に面をもつ。胴部との接合は差し込み式。	外面ハケメ後上半ナゲ酒し後、粗い横方向のミガキ。内面ハケメ後、下半横方向のミガキ、上半横方向の粗い六角形状のヘラミガキ。	1～2mm大の砂粒含む。焼成良好。赤褐色。内外面の一部黒色。底か? 杯部のみ遺存。
9号中庭 床西	20	小 壺 丸底壺	口径 8.3 最大胴径 9.4 器高 7.3	口径部は内湾気味に立ち上がるくの字口縁。体部は扁球。	口径部内外面ほこなで。体部外面ハケメ調整後、胴部外側ナゲ酒し、体部内面粗いヘラケズリ後、底部斜縁江尻。	1mm大の砂粒・茶色粘土含む。焼成良好。淡黄褐色。ほぼ完全。
埋土	21	高杯	口径 17.2 胴径 9.6 器高 12.0	皿状の杯部。口径端部と胴部は内面。杯部は厚く、胴部との接合は差し込み式。	杯部外側ヨコナゲ後、横方向の粗いミガキで縦方向のハケメを残す。杯部内面放射状のヘラミガキ、ハケメを残す。柱状部外面取り、上位に粗いヘラミガキ、ハケメが残る。柱状部内面脱り目。胴部ハケメ後ナゲ。	2～3mm大の石英・長石含む。焼成普通。淡黄褐色。杯部1/2遺存、胴部完全。
埋土	22	高杯	口径 17.0	皿状の杯部。口径端部は角張り。胴部との接合は差し込み式。	杯部外側横方向の粗いヘラミガキ、ハケメが残る。杯部内面ヘラミガキだが磨紙により不明瞭。	1～2mm大の石英・長石含む。焼成普通。淡黄褐色。杯部1/2遺存。



第23図 8号・9号住居、1号土壌墓、遺構外出土遺物

(括弧内) は測定値

出土位置	種別	法量(cm)	形 態	手 法	胎土 焼成 色調 遺存度
9号住居 埋土	23 高杯	口径 9.5 高径 9.5	直状の杯体、脚部端部は凹面をなす。脚部との接合は差し込み式。	外面外面上半横方向のヘラミガキ、下半横方向のハケメ。杯体内部磨練により不明瞭であるがヘラミガキか。柱状部外面面取り後、横方向のヘラミガキ。柱状部内面取り目。	1m大の砂粒含む。焼成普通。黄褐色。脚部ほぼ完全。杯部は底部のみ遺存。
1号土壌墓 底面	24 杯A	口径 15.4 高径 5.5	口縁部は外傾し、端部が外反する。	口縁部内外面コロナガ後、横方向のヘラミガキで、内面は特に丁寧。底部外面ヘラミガキ後、ナガ磨盤。底部内面凹面利用。一方向のヘラミガキ。	1m大の砂粒含む。焼成良好。淡桃褐色。ほぼ完全。全面に赤色顔料塗布。
遺構外 (9号住居埋土)	39 瓦字破	長さ (5.7) 幅 (6.3) 外縁部厚さ 1.8 脚部厚さ 0.7	破片部の破片。外縁部と脚部からなり、外縁は鋭角部で鋭くなる。脚部は欠損するが、破片から六角形と測定される。	外縁部側面は横方向のケズリ後、指子状の沈着を認む。外縁部、裏面ともナガ仕上げ。裏面は平行なキ目が遺存する。	1～3mm大の砂粒含む。焼成良好。灰色。



第24圖 石製品

石製品一覧表

(cm・g：()は遺存額、頁の○は図版)

種類	No.	頁	長さ	幅	厚さ	重量	遺存	備考
四石	S 1	29・㊸	13.4	10.3	5.3	710	ほぼ完存	平皿面の片前に1ヵ所ずつ、計2ヵ所の凹み、両面磨り、周縁部に磨減部。
	S 2	29・㊸	15.1	6.5	5.9	780	完存	先端2ヵ所に鋭き、磨り全周。8号住居床面。
	S 3	㊸	10.5	5.7	5.5	398	ほぼ完存	先端2ヵ所に鋭き、平皿面磨り。
	S 4	㊸	8.7	5.2	3.9	228	完存	先端2ヵ所に鋭き、磨り全周。
	S 5	㊸	8.1	6.4	7.4	530	完存	先端2ヵ所に鋭き、磨り面有り。
	S 6	㊸	10.2	6.0	3.8	312	完存	先端2ヵ所に鋭き。
	S 7	29・㊸	8.0	5.8	4.0	218	完存	先端1ヵ所に鋭き、磨り全周。
	S 8	㊸	15.3	7.8	7.7	945	ほぼ完存	先端1ヵ所に鋭き。
	S 9	㊸ (14.7)	8.1	6.0	(7.65)	欠損	先端1ヵ所に鋭き。	
	S 10	㊸ (11.4)	8.4	5.3	(6.35)	欠損	周縁部1ヵ所に鋭き。	
磨石	S 11	29・㊸	13.6	7.6	2.9	466	完存	全面磨り。
	S 12	29・㊸	10.0	6.6	2.9	292	完存	全面磨り。
	S 13	(7.4)	(7.5)	(8.6)	(5.30)	欠損	全面磨り。	
	S 14	29・㊸	11.4	(6.1)	(3.9)	(406)	欠損	平皿面両面磨り。
	S 15	㊸	8.9	5.7	3.1	246	完存	平皿面両面磨り。
	S 16	㊸ (9.7)	(5.2)	2.7	(216)	欠損	平皿面両面磨り。	
	S 17	㊸	10.3	8.5	6.9	870	完存	磨り2面。
	S 18	㊸ (4.8)	5.8	4.9	(130)	欠損	磨り2面。	
	S 19	29・㊸	13.0	4.9	4.8	494	完存	先端部1ヵ所磨り。先端部1ヵ所に加工痕。一部非化。
	S 20	㊸	15.8	8.9	5.3	860	完存	平皿面磨り。
	S 21	㊸ (8.2)	(7.3)	(2.7)	(204)	欠損	磨り1面。	
	S 22	㊸	8.8	(6.8)	5.9	(418)	欠損	磨り1面。
	S 23	(4.0)	(2.3)	(1.0)	(8)	細片		
	S 24	(3.3)	(1.9)	(0.3)	(3)	細片		
台石・石皿	S 25		11.6	(14.8)	9.5	(1540)	欠損	磨り4面。
	S 26	29・㊸	(20.3)	(23.2)	7.5	(4220)	欠損	磨り2面。4号住居床面。
	S 27		(9.1)	(6.2)	(7.0)	(244)	欠損	磨り2面。
	S 28		(15.7)	(14.2)	(13.7)	(3786)	欠損	磨り2面。
	S 29		(11.2)	(10.1)	(14.3)	(1980)	欠損	磨り2面。
	S 30		(9.9)	(6.3)	(5.4)	(366)	欠損	磨り2面。
	S 31		(18.2)	(7.9)	7.3	(1369)	欠損	磨り2面。
	S 32		(14.2)	(8.7)	(11.3)	(1659)	欠損	磨り2面。
	S 33		(18.6)	(7.3)	(10.8)	(1820)	欠損	磨り1面。
	S 34		(10.9)	(8.1)	(7.9)	(555)	欠損	磨り1面。
	S 35		(12.9)	(7.7)	(5.0)	(1046)	欠損	磨り1面。
	S 36		(12.2)	(8.7)	(10.5)	(1630)	欠損	磨り1面。
	S 37		(13.2)	(10.6)	(12.6)	(2280)	欠損	磨り1面。
磨製石斧	S 38	29・㊸	(8.6)	(7.4)	(5.5)	(525)	欠損	
打製石斧	S 39	29・㊸	(10.4)	13.1	3.0	(565)	欠損	
	S 40	㊸	(12.7)	8.9	3.0	(450)	欠損	
	S 41	㊸	(8.8)	(5.2)	2.0	(122)	欠損	
磨石	S 42	29・㊸	(8.0)	3.3	1.4	(63)	欠損	
	S 43	29・㊸	11.5	13.5	9.1	1780	完存	
	S 44	㊸	(11.0)	(7.6)	(6.0)	(620)	一部欠損	
	S 45		(13.1)	(8.9)	9.7	(1208)	欠損	

IV まとめ

今回発掘調査した船沖遺跡では縄文時代から中世に至る多様な遺構・遺物が確認された。大まかな立地として調査区北側が奈良時代から平安時代の葬地、南側が古墳時代の竪穴式住居、掘立柱建物といった集落跡である。調査区北側は貯蔵穴が存在するため、北側に集落が広がっていた可能性もある。そして調査区南端にまとまって縄文時代の落し穴が存在する。

ここでは竪穴式住居、掘立柱建物など集落に関する遺構、墳墓に関する遺構、落し穴の3つに分けて発掘調査によって分かった事を整理してまとめとする。

集落

竪穴式住居 住居は調査区中央の斜面から南に広がる平沼地で合計9棟確認した。先ず遺物について、次に遺構との関係について述べる。

住居から出土した遺物は、必ずしも良好な出土状態でなく住居廃絶後に流入した遺物や小片が多かったが、住居の築造時期に伴うと考えられる遺物について述べる。出土土器は土井編年^(註4)にあてはめると古墳時代前期前半(4世紀前葉頃)から5世紀後半頃の時期である。土師器を主とし、須恵器は埋土中の僅かな小片を除いてほとんど出土していない。

3号住居一埋土中から出土した土器で、口縁部内面にヘラミガキをする大型の甕6・7、口縁部ヨコナデ3単位の甕4は、宮ノ下4・6号住居出土土器の時期(4世紀前葉から中葉頃)に相当する。

2号住居一埋土中の土器で、甕3は口縁端部を丸くおさめ、肩部外面に刻み目が巡る。上神龜山方形周溝墓出土土器に相当(4世紀後葉頃)する。

6号・8号・9号住居一8号住居は埋土中の土器がほとんどであるが、床面から出土したくの字口縁甕18は体部内面ヘラケズリが頸部まで達せず、体部が球形である。9号住居埋土中出土の高環21・22・23はいずれも坏部が皿状で、8号住居の高環19の坏部がわずかに外反するのに比べ新しい要素である。これらの土器は上神龜山方形周溝墓出土土器と後口谷B21・2号住居出土土器の間を埋める時期とみられ、5世紀前半頃と推定される。6号住居埋土中の高環の12は皿状の坏部で、高環13は塊状の坏部で坏底部と坏部の境目に稜をもつ。12が5世紀前半、13が5世紀後半と推定される。

4号住居一遺物の出土量が僅かであるが、甕9はやや退化したくの字口縁で体部内面のヘラケズリが頸部まで達せず低く長胴化しており、8号住居の甕18より新しく5世紀中頃と推定される。1号・5号・6号住居で見られる塊・高環は出土していない。

1号・5号住居一1号住居埋土中の塊1は内面放射状と横方向のヘラミガキ、5号住居床面の塊10は暗文風ヘラミガキで、1のほうが皿に近く古い要素をもつ。5世紀後半頃の時期と推定される。

先に住居の遺物を時期別に分けたが、遺構ではどの様になるか検討する。

3号・2号住居のどちらも隅丸方形で調査区南寄りの隣接した場所にある。7号住居は遺物が出土していないが、隅丸方形または多角形が想定され辺の方向が3号・2号住居に近く、4世紀代の可能性が推定される。

6号住居は方形、8号・9号住居は長方形で、調査区北寄りの斜面沿い標高54~57mに分布する。いずれも南あるいは南東辺に壁際中央ピットをもっている。8号住居と9号住居はどちらも2本柱とみられ、柱間と壁際中央ピットを長方形に一段掘り下げしており、9号住居の方が小型化するが類似しているといえる。このため2つの住居は時期的に連続していると推定され、次の時期の4号住居が小型で2本柱、柱間と壁際中央ピットを長方形

に一段掘り下げることから、8号→9号住居→4号住居への流れと考えられる。以後、斜面の方向が異なる8号・9号住居を除き、住居の辺がほぼ東西南北の方位に沿っているのも特徴的である。1号・5号住居は調査区南に点在する。

以上、遺物と遺構から住居を時期別に整理すると次のようにまとめられる。

I期-3号住居

II期-2号住居

III期-6号住居・8号住居・9号住居

IV期-4号住居

V期-1号住居・5号住居

限られた調査範囲という前提ではあるが、隣接する同時期の住居間距離は、7号住居がI期と仮定すると、I期-3号住居と7号住居間約43m、III期-6号住居と8号住居・9号住居間約50～53m、V期-1号住居と5号住居間約67mと時期が下るにつれて領域の拡大していく様相が復元できる。各時期とも住居は1棟、ないし2棟といった程度であるとみられる。

掘立柱建物 掘立柱建物は調査区中央の斜面から南に広がる平坦地で合計11棟確認し、その分布は竪穴式住居の分布とほぼ一致する。住居に伴うものは特定できなかったが、各時期のものが存在すると考えられる。

建物規模は桁行1間×梁行1間が1棟(8号・11号掘立柱建物)、桁行2間×梁行1間が3棟(1号・2号・4号掘立柱建物)、桁行2間×梁行2間が4棟(3号・5号・10号掘立柱建物)、桁行14間以上×梁行3間以上が1棟(7号掘立柱建物)である。桁行2間×梁行2間の建物のうち、1号掘立柱建物は桁行側に布張りするもので、3号・5号・10号掘立柱建物は総柱建物である。

7号掘立柱建物は長大でかつ柱間が狭い総柱建物で、東側が張り出すもので他の建物とは様相が異なる。このような掘立柱建物は、市内・東町の山名氏館跡推定地で発掘した15世紀と推定される掘立柱建物群に似る。しかし、山名氏館跡推定地の建物は柱穴掘り方に根石状の礎が敷かれるという違いもあり、関連性については不明確である。

掘立柱建物の造られた時期は土師器が少量出土したにとどまるため時期の決め手に欠くが、建物主軸方向で分けるとおよそ3つに分けられる。斜面にある7号・8号・9号掘立柱建物は桁行あるいは梁行が斜面と平行で、2号・11号掘立柱建物は北から約30°東に振れ、それ以外は北から10°前後東に振れる。この3つのグループは造られた時期の違いを示す可能性がある。

1号段状遺構 調査区中央で斜面に並行する形で溝で区画された内側にピットが東西に並ぶ。ピットは南側に展開するかどうか不明であるが、何らかの建物であった可能性が考えられる。造られた時期は伯耆国庁第2段階(SD-05)の遺物が出土しており、9世紀後半頃と推定される。

土壌 調査区中央の斜面を中心に5基確認した。4号土壌は伯耆国庁第2段階(SD-05)から第3段階(SD-38・39)の土器が出土し、3号土壌も小片ながら伯耆国庁第2段階・第2段階の土器が出土した。2号土壌と3号土壌は平面形・断面形が類似し、同時期のものと推定される。これらの造られた時期は9世紀後半～10世紀前半頃と推定される。

柵列 調査区中央から南で5確認した。柵列規模は1号・3号・5号柵列が2間、2号柵列が3間、4号柵列が4間確認したが5号柵列以外は調査区外まで延びている可能性がある。中央斜面にある2号・5号柵列が斜面に沿い、調査地南側にある1号・3号・4号柵列は北から10°前後東に振れており、1号・3号・4号柵列は1

号・3号・～6号・10号掘立柱建物の主軸方向に合う。1号櫛列の造られた時期は出土遺物から古墳時代の可能性がある。

溝 調査区中央の斜面で4条確認した。いずれも調査区外まで延びており、斜面に直交する1号・2号溝と、斜面に並行する3号・4号溝がある。造られた時期は出土遺物から、2号溝が古墳時代、4号溝が平安時代の可能性がある。

墳墓

調査区北側の斜面と北端尾根で墳墓1基、土壇墓2基を確認した。

1号墳墓 調査区北端の丘陵頂部で確認した。方形の周溝が巡るが、主体部は削平によって遺存しない。築造時期は周溝の断面形が墳丘側の丸くならないV字形であること、埋土中から出土した僅かな土師器（伯耆国庁第2段階か）から概ね9世紀代とみられる。

1号土壇墓 調査区北側の斜面で確認した。北側小口底面で副葬品の土師器杯Aが出土したため北頭位と推定される。この土師器の器形は口縁部が外傾し、端部が外反する。調整は全面ヘラミガキの丁寧なつくりで、口縁部内外面横方向のヘラミガキである。このようなタイプの土師器は伯耆地方ではこれまでに未確認で、器形は畿内の土師器編年という飛鳥IV^(註6)の土器に近いが、この時期の特徴である暗文は無い。造られた時期は断定し兼ねるが器形から飛鳥IVの時期（7世紀第4四半期頃）と推定される。この時期の墓としては市内の長谷遺跡^(註7)2号土壇墓、羽合町の長瀬高浜遺跡^(註8)で木棺墓6基、土壇墓2基が知られている。

2号土壇墓 調査区東側の南斜面で確認した。埋土中で直径約0.3～0.4mのやや平らな石が4個底面から若干浮いた状態で出土した。底面から浮いていたこと、火葬墓の棺台にみられるような火を受けた様子が無いことから、埋葬方法は土葬とみられ、石は遺体の上に乗せたものと考えられる。造られた時期は、遺物が小片しか無いため決め手に欠くが、淀江町・福岡遺跡^(註9)S X-01が、2号土壇墓と同様に大きめの礫6個を遺体の上に詰めた状態で出土しており、和鏡（網薄双鳥文鏡）等の副葬品が出土し平安時代末以降の築造と推定されていることから、造られた時期は平安時代から鎌倉時代の土壇墓と推定される。

落し穴

調査区南端付近で6基まとまって確認した。平面形は円形3基、楕円形2基、方形1基で、いずれにも底面にピット状の下部施設があった。遺物は出土していないが形態から、落し穴が造られた時期は縄文時代と推定する。その立地は丘陵縁辺部に限られ、底面が円形の1号・3号・6号落し穴と、楕円形の4号・5号落し穴がそれぞれ約6～9mの間隔で並んでおり、同時期に造られた可能性がある。落し穴はけもの道に沿って造られると考えられ、これらの線を結ぶとけもの道が推定できる。底面が楕円形の落し穴はけもの道に対して、短軸を結ぶ形で配置されており、市内・中尾遺跡^(註10)の状況と一致する。

以上、当遺跡は縄文時代から中世に至る複合遺跡であることがわかった。調査は道路部分に限定されており、未解決の部分も多いが今後の調査研究に委ねたい。

註

- 1 岡平拓也 「下米積地区(船沖遺跡)」『倉古市内遺跡分布調査報告書11』 倉古市教育委員会 2001
- 2 興淳一郎 「土器類」『伯耆国庁跡発掘調査概報(第5・6次)』 倉古市教育委員会 1979
- 3 田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981
- 4 土井珠美 「鳥取県の状況」『弥生後期から古墳時代初期のいわゆる山陰系土器について』 第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986
- 5 竹富照也子 『山名氏館跡推定地発掘調査報告書』 倉古市教育委員会 1993
- 6 古代の土器研究会編 『古代の土器1 都城の土器集成』 1992
- 7 竹中孝浩 「平成4年度調査」『長谷遺跡発掘調査報告書』 倉古市教育委員会 1994
- 8 財団法人鳥取県教育文化財団編 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 財団法人鳥取県教育文化財団 1981
- 9 西川敬 「土墳墓(SX-01)について」『福岡遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団 1992
- 10 竹中孝浩 「縄文時代の調査」『中尾遺跡発掘調査報告書』 倉古市教育委員会 1992



調査区北側調査前全景 (北から)



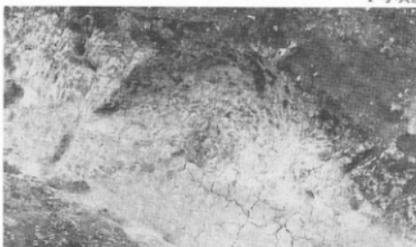
調査区北側調査後全景 (南から)



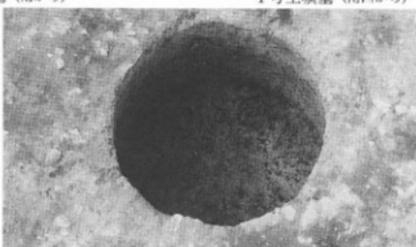
1号墳墓 (南から)



1号土壇墓 (南西から)



1号貯蔵穴 (南から)



2号貯蔵穴 (南から)



調査区南側調査前全景 (北東から)



調査区南側調査後 8号・9号住居付近 (南東から)



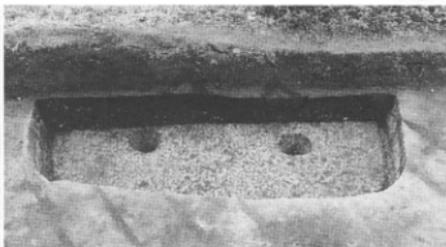
調査区南側調査後全景 (北東から)



調査区南側調査後全景 (南西から)



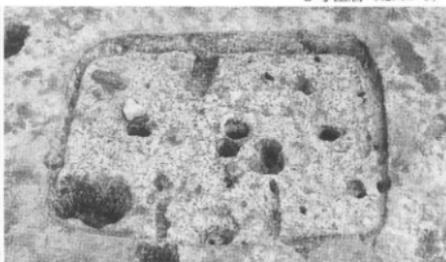
1号住居 (南から)



2号住居 (北西から)



3号住居 (北西から)



4号住居 (南から)



5号住居 (西から)



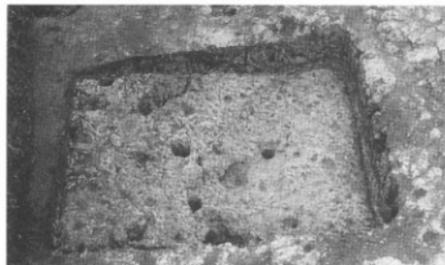
6号住居 (南から)



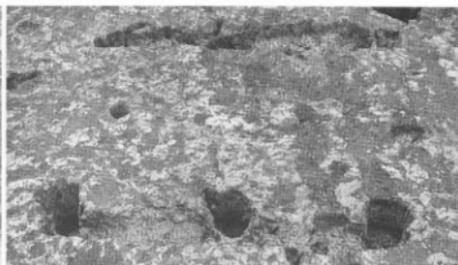
7号住居 (北西から)



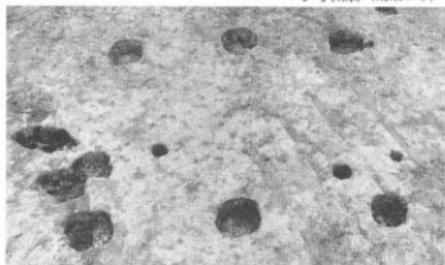
8号住居 (北東から)



9号住居 (南東から)



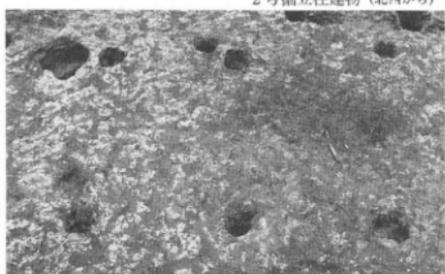
1号掘立柱建物 (東から)



2号掘立柱建物 (北西から)



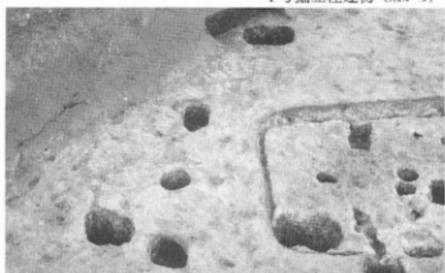
3号掘立柱建物 (南東から)



4号掘立柱建物 (東から)



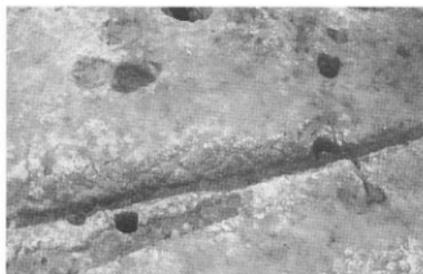
5号・10号掘立柱建物 (西から)



6号掘立柱建物 (南から)



7号掘立柱建物 (北西から)



8号掘立柱建物 (北西から)



9号掘立柱建物 (南北から)

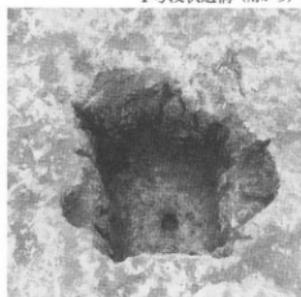


1号段状遺構 (南から)

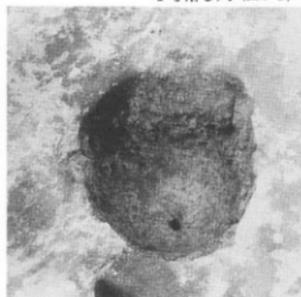


1号罫列 (南から)

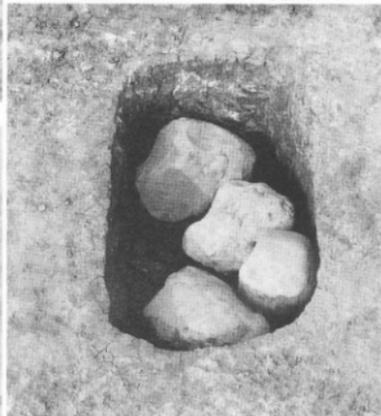
2号罫列 (西から)



1号落し穴 (西から)



2号落し穴 (北東から)

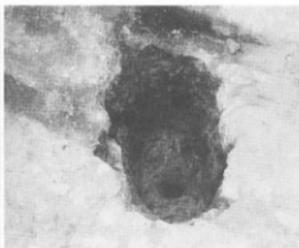


2号土壇墓 (南西から)

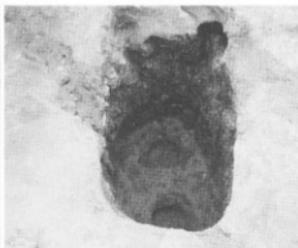
図版6



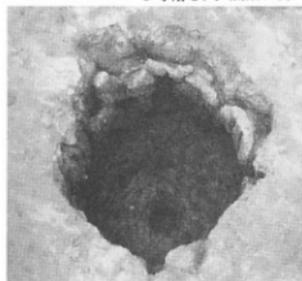
3号落とし穴 (南東から)



4号落とし穴 (南から)



5号落とし穴 (北西から)



6号落とし穴 (東から)



1号土壇 (南西から)



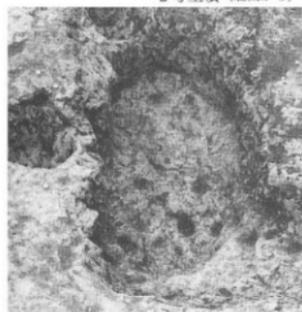
1号(左)・2号(右)溝 (南西から)



2号土壇 (北西から)



3号土壇 (北西から)



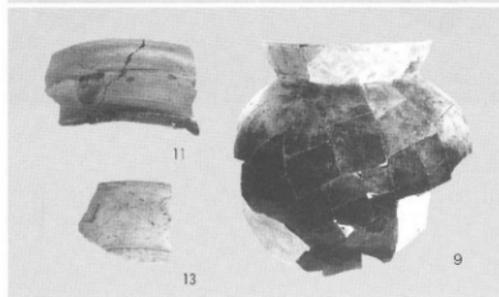
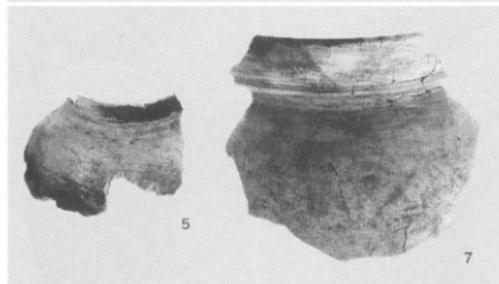
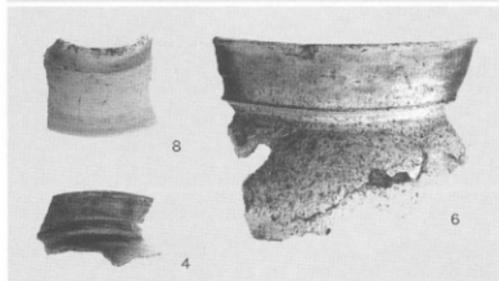
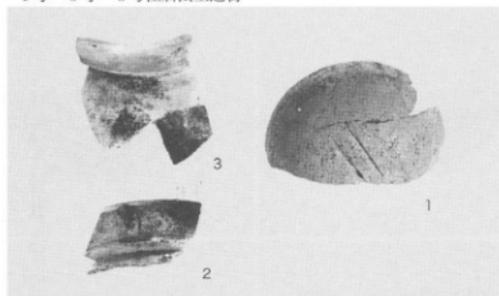
4号土壇 (北から)

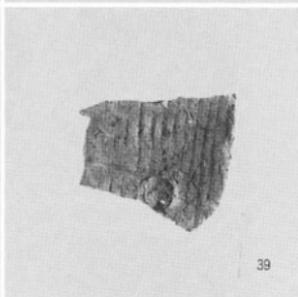
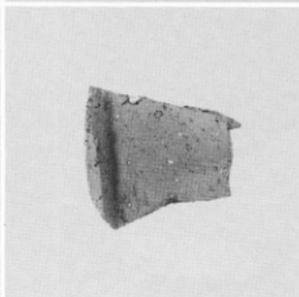
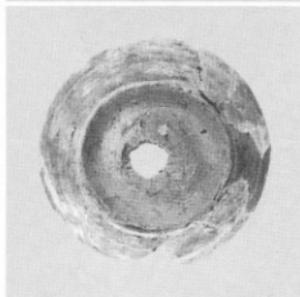
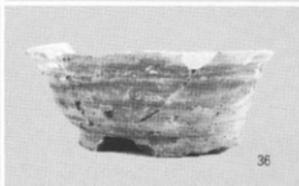
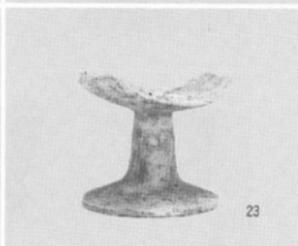
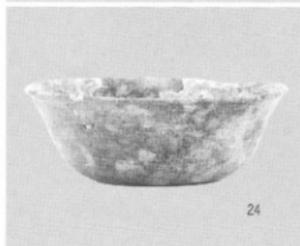
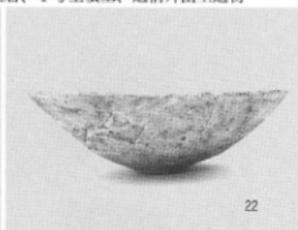
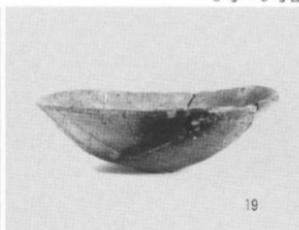


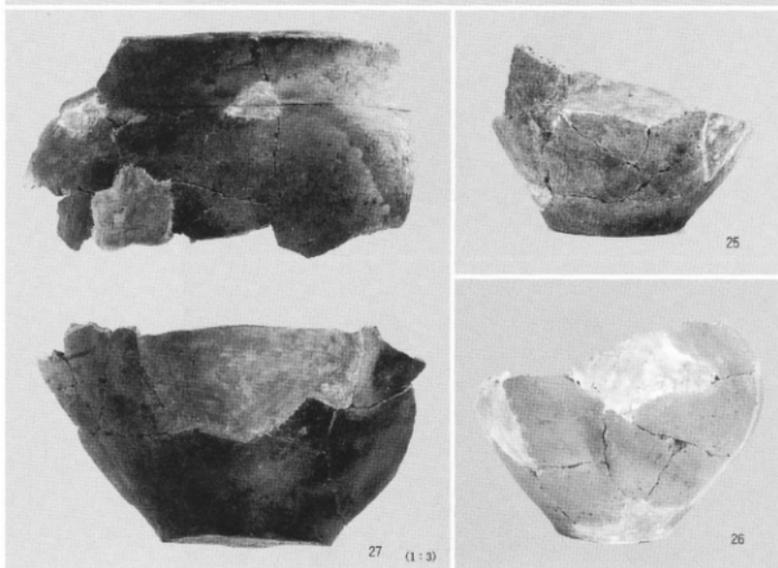
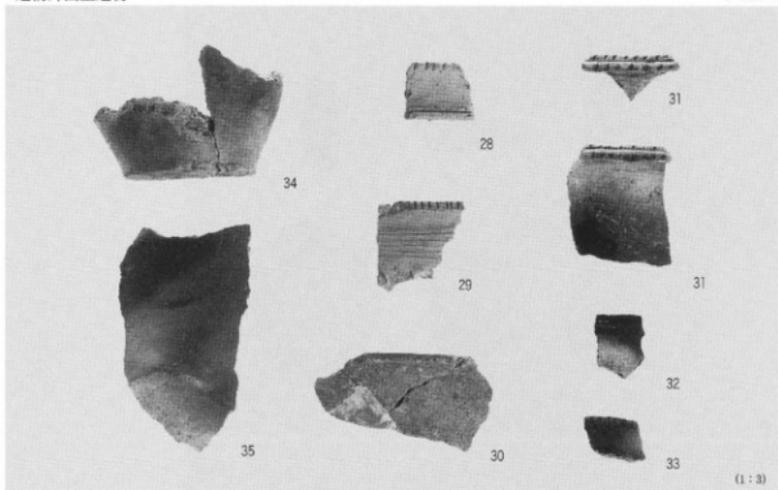
5号土壇 (南から)

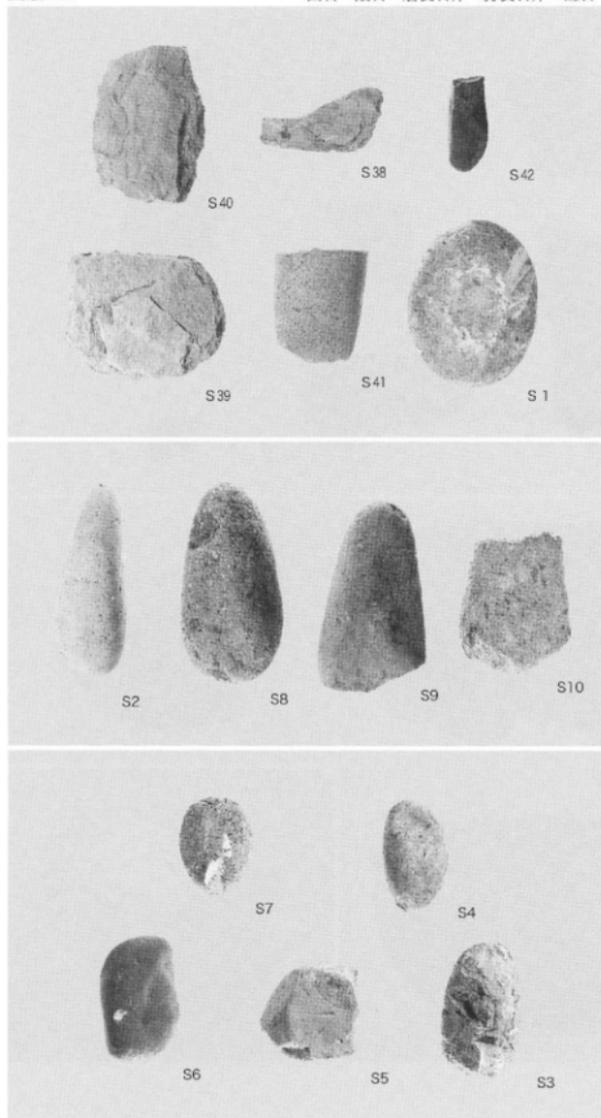


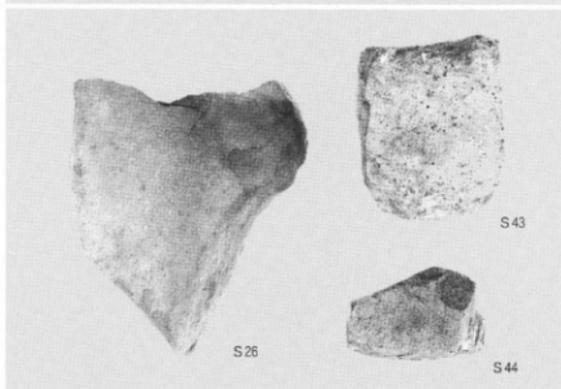
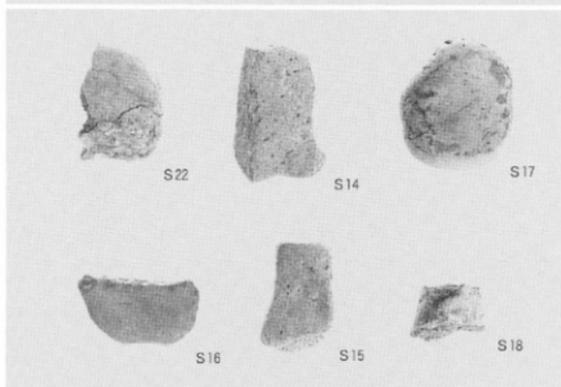
3号溝 (北西から)











報告書抄録

書名	紀伊半島の歴史文化財調査報告書							
副書名	東宮久米ヶ原地区の縄文・弥生時代の遺跡調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第111集							
調査地名	加藤地区							
調査機関	倉吉市教育委員会							
所在地	〒692-8611 鳥取県倉吉市赤坂72番地 TEL.0858-22-4419							
発行年月日	西暦 2001年2月28日							
所在地名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査内容
		非町村：遺跡番号						
所在地名	紀伊半島の歴史文化財調査報告書	31203:4OSF	35° 25' 25"	133° 45' 55"	20000601～20000609	2600㎡	東宮久米ヶ原地区の縄文・弥生時代の遺跡調査報告書	
所在地名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物			特記事項		
紀伊半島	集落	縄文：溝・穴 6基 古墳：墓穴式石室 9基 竪立住居跡 11基 弥生～古墳：貯蔵穴 2基 古墳：土塚墓 1基 平安：段伏遺構 1 城郭 1基 中世：土塚墓 1基 古墳以降：櫓列 5 土塚 5基 溝 4基	弥生土器・土師器・須恵器・凹石・磨石・磨石・白石 石皿・磨製石斧・打製石斧・磁石			古墳時代前期～後期の集落址。		

210.2
Kur
(111)

図書館

船沖遺跡発掘調査報告書

県営久米ヶ原地区掘い手育成畑地帯
総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成13年2月28日 印刷

平成13年2月28日 発行

編集 倉吉市教育委員会

印刷 山本印刷株式会社
